

## 資料紹介

### 白岩龍平書簡（野崎萬三郎・野崎武吉郎宛）の紹介

町 泉寿郎

白岩龍平（一八七〇～一九四二）は岡山県英田郡讚甘村大字宮本に出生した実業家で、上海の日清貿易研究所に学び、蘇杭航路・湖南航路など中国航路を開拓し、日中要人に知己を多く持ち、日中交流にも尽くした人物として知られる。中村義『白岩龍平日記』（研文出版、一九九九年）によれば、白岩龍平が中国に関心を持ったきっかけは、美作出身（久米北条郡埴和村大字中埴和谷字大瀬毘、現美咲町）の岸田吟香（楽善堂薬舗・書肆）や岡山の西穀一らの影響があったとされる。また、白岩龍平は初学の師岸南岳門の先輩で二松學舎に学んだ法曹能勢萬（鶴田藩出身）を頼って上京し、官僚小松原英太郎（岡山出身、文相時代に二松義会に尽力）とも若い頃から交流があった。実業家となった白岩龍平は、湖南地方の重要性を早くから説き、近藤廉平（日本郵船社長）や渋沢栄一らの出資を受けて、南潯鉄道敷設などを通して日本の中国中南部の進出にも関与した。

中村義は『白岩龍平日記』のなかで、白岩龍平の書簡について次のように記し、新たな書簡の発見に期待を寄せた。

白岩の日記を見ると、毎日のように、「発信某々」と書簡を出していることに気付く。……また埋もれている書簡が多い筈であり、今後新たに発見されるに違いない。しかも、ただ数量だけのことでなく、『近衛日記』に収録されているのを見るだけでもその内容も多彩かつ具体的で資料的に価値ある書簡が多く、研究に資するところ大きい。（八〇頁）

中村義はまた、日清戦争後から明治三十年代にかけて白岩が日清貿易のために組織した大東新利洋行や大東汽船を支援し

たメンバーが、「岡山同郷という地縁的なむすびつきと日清貿易研究所の同窓を柱に」（四〇頁）したものであったと記している。

本稿に紹介する白岩龍平書簡は、岡山の豪農・官吏・経済人として知られる野崎万三郎宛の書簡群に含まれるもので、近年、二松學舎大学の所蔵に帰した。その内訳は、白岩龍平から野崎万三郎に宛てた書簡、および野崎武吉郎（備前児島郡味野の素封家・製塩業・政治家）から野崎万三郎に宛てた書簡のうち白岩龍平に関する言及があるものと、白岩書簡の写し（野崎武吉郎宛）とである。中村義の指摘の通り、白岩書簡は資料的価値に富み、かつ彼の経歴の初期において岡山の人脈が極めて重要であったことを明らかに示すものになっている。

当該書簡が書かれた時期は明治二十三年から同三十三年にかけてのものであり（白岩龍平の二十歳から三十歳までの時期）、白岩は師と仰いだ荒尾精（日清貿易研究所長）の歿後（明治二十九年十月三十日台北にて客死）、明治二十九年十一月五日から日記を付け始めているが、それ以前の時期の記録は比較的乏しく、日清貿易研究所時代、日清戦争中、大東新利洋行・大東汽船など日中貿易会社創業時代の記録として貴重である。

白岩龍平書簡の概要を解説するに先立って、まず野崎万三郎と野崎武吉郎について簡単に紹介しておこう。

野崎万三郎（一八三九～一九一〇）は、十七世紀前半の干拓によって新田開発が進んだ吉井川河口の邑久郡幸島村西幸西（現在の岡山市東区西幸西）の庄屋の家に生まれ、明治期に岡山県庁の官吏となり、地租改正など収税実務にあたり、退官後は銀行業や福祉施設の設立に携るなど、常に民衆の側に立って岡山県の税政・民政などに尽力した人物である。明治二年に岡山藩士に取り立てられ、神崎村に文武郷学を開設するために私財を投じた。同三年に大里正（大庄屋）となり岡山藩に対して建白書を提出し、同四年の岡山藩による悪田畑改良事業とそれに対する農民の反対運動に際しては農民の代表となって一七〇〇町歩の租税額を改正させることに成功した。同五年には大蔵省租税寮の十二等出仕を拝したが、すぐに辞表を提出して帰郷している。同年より同十五年まで岡山県租税課に奉職して地租改正事業に当たった。同十二年には西幸西村の相互扶助組織協同社を

設立し社長として運営した。同十七年には岡山県収税長、同二十一年には旧小田県主導による殖産商社の改革に当たり、また児島湾開拓に対する反対運動を説得した。同二十二年岡山県書記官、同二十三年岡山県参事官を経て、同二十六年非職となり岡山県庁退官。その後も閑谷保甞会幹事、水利権争議の調停などに当たり、同二十七年には岡山貯蓄銀行頭取、同三十年には備作恵済会を設立して感化院・保護院を運営し、また県命を受けて農工銀行設立した（三島中洲撰「野崎君万三郎碑」、および岡山大学図書館野崎家文書「履歴書」による）。

かつて内藤正中が明らかにしたように（『士族授産の研究』『自由民権運動の研究』）、明治初期の岡山において、こうした地租改正事業や士族授産事業を通して、花房端連（一八二四～一八九九）、中川横太郎（一八三六～一九〇三）、杉山岩三郎（一八四一～一九一三）、西毅一（一八四三～一九〇四）、岡本巍（一八五〇～一九二〇）ら改革派士族と豪農・豪商層が結束を強めていったと見られること、またこの結束が地域社会・経済の近代化に長く作用したことは見落とせない。

次に野崎武吉郎（一八四八～一九二五）は、野崎家の始祖武左衛門を祖父として、常太郎を父として生まれ、父常太郎・兄市太郎が早く亡くなったため、武左衛門の歿後、十七歳で家督を相続した。明治六年に岡山県庁出仕を拝し勸業掛員となったが、間もなく辞した。野崎家は藩政期から製塩業によって財を成し、岡山藩に巨額の融資をしたほか、明治以降、病院・防疫・警察署・裁判所出張所・県道・学校など地域の公共事業への寄附、また日清日露両大戦の際の軍事費や天災地異の際の救護費などの寄附を通して、社会貢献した。武吉郎は明治二十三年に第一回帝国議会が開かれると、多額納税者として貴族院議員に当選し、国政にも尽くした。

前述の西毅一は明治三年に渡清し、早くから日清貿易を構想していたことが知られているが、野崎武吉郎もかなり早い時期から対中貿易を構想していたらしく、白岩龍平らに対する日清貿易研究所への留学支援は、日中貿易の実務者養成に野崎武吉郎が関心を持っていたことの証左である。

日清戦争に際して、明治二十七年十月に広島で臨時帝国議会が開催されると、武吉郎は全国の製塩業者を厳島に招集して

十一月十五日に大日本塩業同盟会を創設し、食塩の清国輸出を協議している。続いて第八回帝国議會（明治二十七年十二月から二十八年三月まで）では「食塩輸出のための彼我塩業状況調査」を建議して二月十四日に両院で可決されている。この結果、清国の塩業調査を目的として農商務省より奥健蔵・井上甚太郎が遼東半島に派遣され、奥らは製法簡易・生産費低廉な遼東半島に輸出の見込みがないこと、その一方で遼東半島以外の中国本部の調査が将来必要であることを報告した。これを受けて、武吉郎らは大日本塩業同盟会を解散して塩業協会を創設し、より広範な清国状況調査を要求していった（『政府ノ遼東塩業調査ニ依テ更ニ意見ヲ述ブ』貴族院議員野崎武吉郎・衆議院議員鎌田勝太郎著、手島知徳発行・印刷、明治二十八年九月九日）。そして台湾が日本領に組み入れられると、武吉郎は明治三十二年頃から台湾の製塩業に着手する（太田健一『野崎台湾塩行の研究』上下、二〇一〇）。

なお、野崎武吉郎と三島中洲が親密な交流を結んだことにも触れておこう。明治三十二年に中洲は子爵板倉勝達の三男勝輝を養子として武吉郎の二女に娶わせている。明治三十四年に中洲は三男復に妻を迎える際に野崎武吉郎の養女として迎えている。祖父野崎武左衛門の顕彰碑（明治五年六月）は山田方谷の撰文とされているが、実際には中洲の代作である。武吉郎が貴族院議員時代に構えた番町の邸はしばしば中洲が利用している。

このほか、野崎家執事を務めた武吉郎の側近田辺為三郎（一八六五～一九三一、号碧堂）と手島知徳（一八五九～一九〇七、号海雪）は、両者とも二松學舎と縁があった。手島は三島中洲の姻族であり、田辺は明治十六年に二松學舎に学び中洲とは遠戚に当たり、二松義会時代にはともに評議員を務めている。田辺は衆議院議員に当選すること二回、白岩龍平と近く、大東汽船社長や日清汽船監査役などを歴任し、日中貿易にも関わりが深かった。洪沢栄一が本格的に二松學舎に関与する大正六年以前において、野崎家は二松學舎の経営に不可欠な存在であったと思われる。

#### 〈日清貿易研究所時代〉

以下、時系列に従って白岩龍平書簡の概要を摘記しよう。本稿に紹介する白岩龍平書簡のうち最も早い時期に書かれた明治

二十三年六月十四日付書簡（翻刻1）は、上海に新設される日清貿易研究所への白岩龍平の入学が決まった時期のものである。日清貿易研究所の学生募集のために荒尾精所長が全国で遊説し、閑谷巒での演説に共鳴した校長西毅一が閑谷巒生（福原林平・河本磯平・高見武夫）を推薦したことが知られている。白岩龍平は閑谷巒出身者ではなく野崎万三郎にとって「旧識」ではないが、これ以前から荒尾精に近い立場にあったので、閑谷巒生に交じって入学することになったのである。

この時点で野崎万三郎は岡山県書記官という職にあったが、岡山県官吏を非職となった明治二十六年からは閑谷巒維持のために組織された閑谷保巒会の幹事を勤めているので、西毅一校長ら閑谷学校の維持に努めたメンバーと野崎万三郎は近い関係にあったと思われる。また「日清貿易研究所岡山県生徒」から千坂高雅知事・野崎参事官宛ての書簡が発信されていることから（岡山大学図書館所蔵野崎家文書）、日清貿易研究所生に対して県単位で関与していたことが推測され、白岩龍平ら日清貿易研究所生にとって野崎万三郎が岡山県側の窓口としての意味を持ったことを窺わせる。

（翻刻2）は白岩龍平が日清貿易研究所入学時に野崎武吉郎が取り交わした学費支給に関する契約書の写しである。明治二十三年六月六日に取り交わされた。

翌二十四年七月二十日付書簡（翻刻3）は、日清貿易研究所生徒三人（福原伴十郎・緒元某・檜崎某）が中国人居住地においてトラブルの末、中国人一人を殺傷した事件の顛末を伝えている。

二十五年四月十九日付書簡（翻刻5）は、広東省各地の「反清復明」一揆、鉄道敷設をめぐる状況、日清貿易の好調などを報じており、白岩龍平の中国政治経済の現状分析における進境を示す内容と言える。なお、白岩龍平は翌明治二十六年に、京都東山若王子に引籠っている荒尾精所長を出迎えるために研究所を無断で抜け出して大阪に帰った廉によって、四月一日付で退校処分を受けた（『統対支回顧録』三六七頁）。前掲（翻刻2）によれば、退学処分になった場合には、野崎武吉郎から仕送りを受けた学費の全額を一度に返済しなければならぬ取り決めとなっていたが、野崎氏の恩情により返済は免除されたものようである。退校処分後も白岩龍平はなお上海に留まり続けて、新設された日清商品陳列所において貿易を実地に学びつつ（翻刻6）、

「謹慎、読書の修養の日々」（前掲中村義 一九頁）を送っていた。

### 〈日清戦争期〉

日清戦争開戦の詔勅は明治二十七年八月一日に發布されている。これに先立って、七月十二日に白岩龍平は日清貿易研究所に復学が許され、卒業証書も授与された（翻刻8）。日清戦争という未曾有の事態に際会し、中国事情に通じた研究所生徒たちを通訳官として活用することになったためと理解できる。

八月八日に上海の白岩龍平のもとに東京の荒尾精所長から電報が届き、白岩龍平は同日のうちに上海から乗船して十一日に門司港に着岸、十三日に野崎武吉郎邸に一泊、十四日に生家に一泊し、十八日に東京に到着した（翻刻7・8）。前年に退学等の不始末があったため、野崎武吉郎には久しぶりの面会、野崎万三郎には久しぶりの音信であつたらしい。対清戦争に関しては後に禍根を残さぬよう徹底的に遂行することを主張し、英国の介入を懸念している（翻刻8）。

東京では荒尾精と芝区琴平町の信濃屋に同宿しており、十月五日に東京を発って大本営附となって広島に在った。

（翻刻9・10・11・12）では、研究所同窓八十余名のうち岡山出身者たちの近況、および野崎武吉郎が熱心に取り組んでいた食塩の中国輸出計画について報じている。スパイ活動容疑をかけられ捕えられた福原林平や高見武夫の死を悼むとともに（翻刻13によれば、明治二十八年六月九日に岡山国清寺で三土追悼会挙行）、景山長次郎、河本磯平、黒崎恒次郎、甲田松太郎、飯塚松太郎らの活動が報じられ、また（翻刻3）に既出の福原伴十郎・緒元が特赦によって出獄したこと喜んでいる（翻刻10）。

白岩龍平は講和条約交渉中の明治二十八年四月に近衛師団に従軍して戦地に赴き、六月十日に無事下関に戻った（翻刻12・13）。帰国後の白岩龍平は京都若王子の荒尾精寓居に寄留していたが、野崎武吉郎は京都に荒尾精に訪問して白岩龍平を野崎家顧問として迎えたい旨を申し入れた。白岩と荒尾はなお数年間は日清間の公益事業に当たりたいと辞退し、但し野崎家に必要がある場合はいつでも協力する旨を返事した（翻刻14）。このことから、野崎武吉郎が日清戦争期の白岩龍平の活動を高く評

価したことが窺える。

### 〈大東新利洋行と大東汽船〉

白岩龍平は、日清戦争後の講和条約による特権条項に基づく「内河航路」を実現すべく、明治二十八年十一月に中国に渡航して以来、上海の日清商品陳列所を拠点に杭州・蘇州・漢口を往復して新開港地の視察に努めた。また友人宗方小太郎と漢口において「漢報」という新聞を発刊した（翻刻15）。そして上海道台や蘇州の地方官の抵抗に遭いながらも、珍田捨巳上海総領事や親友姚文藻らの支援を得て、明治二十九年十月には上海―蘇州―杭州を航行する大東新利洋行の開設にこぎ着けたらしい（翻刻16）。中国航路が緒に就いた矢先、白岩龍平は恩師荒尾精が台湾で黒死病に罹って客死したとの悲報に接した。（翻刻17）には荒尾精の臨終の様子とともに、白岩龍平の弔辞が記されている。

白岩龍平の航路開拓に向けた努力を外務省の一部など日本国内では「無謀軽率」と否定的に見る者もあり、野崎武吉郎は白岩龍平を一旦帰朝させようとした（翻刻18）。白岩龍平は創業間もない今、中国を離れることはできないと野崎武吉郎の勧めを断り、野崎万三郎に依頼して花房端連・河野忠三知事・杉山岩三郎や紡績業者ら岡山の有力実業家から河原信可（岡山出身）前社長ら大阪商船会社の要人に中国航路拡張を働きかけて欲しい旨を伝えた（翻刻19）。

明治三十年は白岩龍平が中国航路拡張のために官民各方面にさまざまな働きかけを行った年である。一月の書簡では、上海―蘇杭航路で郵便通送事業を請け負うことと引き換えに、通信省から通送料を受け取る契約を締結することを報じたが、公金を受給するためには大東新利洋行の会社組織を改良することが大前提であった。清国人が出資していることも問題視された。会社組織改良のために帰国することを決めた白岩龍平は、野崎万三郎に杉山岩三郎や河原信可らと協議してほしいと依頼した（翻刻20・21）。三月から六月にかけて、白岩龍平は帰国して岡山・大阪・東京を往還し、各方面に事業拡張のための具体案を説いた。白岩龍平帰国中の留守は、同郷・同窓の河本磯平が守った。

河野信可は、事業推進のための資金計画として、①大阪の有力者に出資してもらう、②実業家と勸業銀行に半額ずつ借入れ、③政府補助を受けて開設される大阪商船会社の揚子江航路の関連事業として蘇杭航路を組みこんでもらうという三案を構想し（翻刻23）、白岩龍平らはこれに呼応して外務・逓信両省を通じて政府の内意として蘇杭航路を揚子江航路の関連事業とするよう大阪商船会社に働きかけたが（翻刻27）、大阪商船会社との交渉は容易に捗らなかつた（翻刻28）。交渉がまとまらないまま白岩龍平は一旦上海に引き上げざるを得なかつたが、事業に理解を示した人物として小村寿太郎外務次官・珍田捨巳上海総領事・佐藤秀顕管船局長・田健治郎通信局長や近衛篤磨（翻刻27）、昆布会社社長の村山長太郎（翻刻30）らが記されている。

白岩離日後も交渉を続けていた杉山岩三郎からの求めに応じて、九月十日、白岩龍平は再び上海から日本に戻つた（翻刻34）。九・十月にかけて、杉山岩三郎と河原信可を岡山財界と大阪商船の代表として、大東新利洋行で日清貿易を推進するための出資に関する協議が続けられ、十月二十九日に杉山岩三郎の別邸における会合によって基本合意に達した（翻刻35～43）。その後も翌三十一年前半期にかけて杉山・河原らとの協議が続けられ、大東新利洋行を改組して新たに大東汽船株式会社を立ち上げ（登記は明治三十一年五月、翻刻51）、政府からは五ヶ年間にわたる補助が得られることとなつた（翻刻52）。七月二十二日、白岩龍平は十ヶ月ぶりに上海に戻り、旧組織大東新利洋行から新組織大東汽船株式会社への引継ぎを進めた（翻刻53）。

明治三十二年一月三十日、小村寿太郎の意見を受けて洞庭湖・湖南に調査に出かけていた河本磯平が漢口で自ら命を絶つた。白岩龍平ら友人が語らつて、上海の墓地に河本磯平の墓碑と記念碑を建立した（翻刻57）。二月に白岩龍平は帰国して岡山と東京で所用を済ませ（翻刻54）、三月初めに一旦上海に戻り（翻刻56）、四月二十二日には大東汽船株式会社の総会に出席するために再び上海を發つて帰国した。白岩龍平は野崎万三郎に對して、「支那問題」はようやく世間一般の関心を集めるようになったが、国家政策としては外交・貿易など各方面において立ち遅れがちであり、これでは故荒尾精も「地下二瞑目セザルベシ」と歎いた（翻刻57）。五月十日には白岩龍平は西毅一の二女艶子と野崎武吉郎（実際には小西増太郎・田辺為三郎が代理出席）の媒酌により結婚した（翻刻58）。翌三十三年春には田辺為三郎が大東汽船の社長に就任した（翻刻59）。

白岩龍平の書簡はここで終わり、以下に掲出する翻刻は青年実業家として歩みだしたばかりの白岩の姿を紹介するにとどまる。『白岩龍平日記』に徴すれば、この明治三十三年から白岩龍平の湖南汽船設立のための活動が始まっており、五月七日には白岩の呼びかけによって「湖南ニ於テ汽船航通ノ業ヲ開ク事」（渋沢栄一日記）を協議するための会合が開かれ、渋沢栄一が出席している。日清戦後不況の最中であつたため、この時期の渋沢は白岩等の主張する中国航路拡張に消極的であつたが、後に日中関係諸事業において深く関わることになる両者の、恐らくこれが初対面であつた（渋沢日記における白岩龍平の初出）。なお、白岩龍平は同年三月三日、芝の紅葉館で開かれた三島中洲の古稀寿宴にも出席している。白岩は三島と親交があつたとは言えないが、白岩日記には上述の能勢萬・小松原英太郎・田辺為三郎・手島知徳のほか、阪谷芳郎・野口多内・福島安正ら二松學舎関係者が散見し、岡山人脈という点でも、二十世紀初頭の日中関係事業に関する人脈という点でも、重なる点が多かつたように見える。したがって、白岩龍平は二松學舎史を考える上でも注目すべき人物である。

## 翻刻

### 1 【明治三十三年六月十四日付 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛】

拝呈、愈御壯康之段奉南山候。降而迂生事拜別後郷里ヲ経而昨十三日夕無恙帰京仕候間、乍憚御休神被成下度候。却説、此回ハ迂生へハ御旧識無之ニモ不拘、萬事不一方ル御懇情ヲ蒙り、御庇廕ヲ以而好都合ニ相運候仕合、愚父兄ハ申迄モ無之、荒尾氏ニも大ニ満悦被下、迂生ニ取り幸榮無此上、感奮罷在候。何卒将来御見捨ナク、迂生一身何角御厚顧ヲ賜り度偏ニ奉希願候。何レ荒尾氏も不日御札之為一書奉呈被下候筈ニ候得共、不取敢以愚札御厚札申上度、勿卒乱筆御海恕奉折候。敬具。六月十四日 龍平拝 野崎書記官殿玉案下

(封筒表) 岡山縣／野崎書記官殿 親展

(封筒裏) 糊 東京芝区明舟町／荒尾方／白岩龍平

2 【明治二十三年某月某日 日清貿易研究所入学時に白岩龍平と野崎武吉郎が締結した学費支給に関する契約書】  
條約書

岡山縣美作國吉野郡讚甘村大字宮本 白岩龍平、日清貿易研究所へ入學ニ付、學費仕送人 同縣備前國児島郡味野村 野崎武吉郎トノ間ニ於テ、左ノ條款ヲ約ス。

第一條

一、龍平、日清貿易研究ノ為メ、入學脩業年限中ハ左ノ割合ヲ以テ學費送金ノコト。

一金拾三円

一ヶ月分學費

内

金五円

脩業料

金貳円八拾錢

被服料

金四円貳拾錢

賄料

金壹円

筆紙墨料

已上

第二條

一、龍平學費一ヶ月金拾三円ヲ毎年四期ニ取纏メ、日清貿易研究江向ケ直送ノコト。

但毎年六月十二月ノ兩期ニ該研究所ノ決算ヲ受ケ、脩業料ヲ除クノ外ハ実費ノ計算ニ由リ、其餘リアルトキハ後期ニ繰込ミ、不足ハ其時々追徴ニ応シ出金ノコト。

第三條

一、龍平長崎ヨリ上海迄ノ旅行航海費、往復壺回分出金ノコト。

但此ノ場合ニ於テハ特ニ日清貿易研究所長ノ証明書ヲ要シ、実費ニ限り出金ノコト。

#### 第四條

一、龍平卒業後、獨立ノ商業ヲ營ミ、若クハ他ノ採用ニ応シ、其他如何ナル事情コレアルモ、野崎家ニ係ル日清間商業上ノ事件委托ノトキハ、事ノ輕重難易ヲ論セス引受クヘキ義務ヲ有スルモノトス。

#### 第五條

一、龍平入學ノ上ハ半途退學為サ、ルハ勿論ニ付、萬不得止事情ヲ除クノ外、退學若シクハ前條約款ニ背戾スル等ノコト之レアルトキハ、其日迄ノ學費仕送り金額悉皆一時ニ還償スベシ。若本人差支ノ場合ニ於テハ、保証人引受辨償ノ責メヲ受クベシ。

右約條確守スル為メ、双方記名調印シ、各壺通ヲ所持スルモノナリ。

年 月 日

岡山縣備前國児島郡味野村

學費仕送人

野崎武吉郎

同縣

美作國吉野郡讚甘村大字宮本

日清貿易研究所入學生

白岩龍平

同縣

白岩龍平保証人

何ノ誰

### 3 【明治二十四年七月二十日付 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛】

拝啓、六月廿六日御認玉書、去六日接到、難有拝承仕候。向暑之候ニ御座候得共、御満堂益御揃御清康被遊御座、奉恭賀候。陳は野生々本月五日付端書（取急キ印紙貼用相忘レ後ニテ心附申候。失敬之段茲ニ御断申上候。）ヲ以テ不取敢御報知申上置候通、殺人事件出来之顛末、再ヒ左ニ御詳報申上候。

○元来上海市ハ城内城外ノ二大別アリ。城内ハ市ノ南方ニ位シ、本縣鎮撫ノ為築キタル古城趾ナリ。城外ハ即チ支那人居住地及外人居留地（英、米、佛ノ三租界アリ）トス。上海城外外壁ハ今尚依然トシテ存シ、四ヶノ城門ハ毎夕九時ニ至レバ嚴ニ閉鎖シテ人ヲ通セズ。支那人ノ城内ニ住スルモノ凡二十万、城外ニ在ルモノ亦殆ンド二十万人、而シテ居留外人ハ決シテ城内ニ住居スベカラザルノ制ナルニモ拘ラズ、曾テ日本神戸駐在支那副領事ノ職ニ在リ数年ノ後帰ツテ上海縣道台即知事ノ幕友（顧問官）ニ當レル姓馮氏ハ居ヲ上海城内ニ占メ、当時五名ノ日本人ヲ其宅ニ寓セシメタリ（聞ク馮氏ハ大ニ日本人ヲ愛シ從來日本壮年ニシテ資本ニ乏シクシテ篤志ナル人ヲ憐ミ、廉價ヲ以テ衣食ヲ給シ、併せて語學ノ教授等ヲ為シ、其周旋慰篤ニシテ日本少壯者ノ為ニ恩惠ヲ蒙ルモノ甚タ多シト云フ）。然ルニ本月三日午後其寓居者ノ中三名、即福原伴十郎（岡山縣人）、緒元某（長崎縣人）、檜崎某（福岡縣人）ハ所用アリテ城外ニ出テ我領事館ニ至リ、事終ツテ午後五時頃同館ニ在ル七里某（福島縣人）ヲ伴フテ城内ナル寓所ニ歸リ、晚酌數番ノ後各々幾分ノ酔ヲ催シタリシガ、九時前ナル頃ヒ、他一名ノ來人ヲ城外ニ見送ラントテ（近來暴徒云々以來、夜城内ヲ独行スルヲ危ミ、且城内ニハ無數ノ惡犬アリ害ヲ為スコト少ナカラザレバ、是等ノ事ヲ心配セシニ由ルナルベシ）右ノ内緒元及檜崎ノ兩人ハ一旦城門ニ至リ、其帰途寓所、即チ馮氏ノ宅ヲ距ルコト凡二丁余ノ処ニ於テ犬アリ兩人ヲ吠エケレバ、直ニ之ヲ打タント欲システツキヲ上ゲテ之ヲ追ヒ、其飼主ノ門前ニ至リ之ヲ打チシニ、門側ニ腰掛納涼シツ、アリシ其主人及家人數名ハ大ニ怒ツテ兩人ノ処置ヲ難スルヤ、兩人ハ更ニ怒ツテ之ヲ責メ、双方暫時爭論ノ末、遂ニ腕力ヲ以テ互ニ打擲ヲ始メシガ、支那人ノ常トシテ外国人トサヘ云ハバ之ヲ賤惡スルノ念深ク、殊ニ當時人心洶々タルノ際ナレバ、忽チ多數ノ匪徒來集シ兩人ヲ真中ニ取卷キ、各々木片又ハ竹刀ヲ執テ之ヲ打タントス。兩人ハ角鬪ノ際終ニ支那人ノ為ニ組伏セラレタルニ、支那人ハ尚其暴行ヲ逞フセントスルノ模様アルニ由リ、兩人ハ纔ニ身ヲ脱シテ家ニ歸ラントセシニ、無數ノ支那人ハ之ヲ追フテ馮氏ノ門ニ攻メ掛ケタリ。兩人ハ余リノ事ニ無念ニ思ヒ、再ビ勇氣ヲ鼓シテ日本刀及ピストルヲ携へ、且側ニ醉臥セル福原ヲ呼び起シテ之ヲ助ケシメ、馮氏家人ノ遮テ之ヲ留ムルヲモ肯セズ、三名直ニ門外ニ出テ先ヅ門側ニ在ル門閃（カンヌキ）ヲ以テ彼ノ飼主ヲ目懸テ其頭部ヲ打碎キタリ。此時支那人ノ激昂ハ益ス甚ク、數丁ノ間恰モ人

ノ山ヲ築キ、其騷擾一方ナラザリシガ、忽チ彼ノピストルノ発砲（空ニ向ケ發シテ威シタルナリ）ニ逢ヒ、兼テ火器ヲ恐ル、コト最モ甚シキガ故ニ、此音ヲ聞クヤ否ヤ、群衆ハ先ヲ争フテ逃走四散シタリ。由テ彼ノ三人ハ重傷ヲ負ハシメタル飼主ヲ捕ヘテ数刀ヲ加ヘ、終ニ死ニ到ラシメタリシカ、此間已ニ上海縣廳ノ知ル所トナリ、警官ノ出張アリタルニ、事情右ノ如クナルヲ以テ、直ニ彼三名ヲ捕拏スベキ場合ナリシモ、上海縣知事ハ臨機ノ處置ニ由リ、其寓所ノ主人ナル馮氏ト示談ノ上、氏ノ責任ヲ以テ此三名ヲ氏ニ托シ、以テ明日ヲ待チ日本領事ニ引渡シノ手續ヲナスコトト定メ、且此際支那人ハ尚鎮靜ノ模様ナク、或ハ馮氏ノ宅ヲ襲撃セントスルノ恐レアルヲ以テ、縣廳ヨリハ特ニ一隊ノ兵ヲ派シテ其門ヲ護衛セシメタリ。」

馮氏ノ家人ハ惶恐夜ヲ徹スルニモ係ラズ、彼ノ三名ハ此夜ハ高鼾熟睡シタリ。翌四日午前九時比ニ及ヒ、緒元及福原ノ兩人ハ如何ナル意思ナリシカ、其夜同宿セシ七里某ト三人相伴フテ外出セントセシガ、馮氏ハ己レノ責任トシテ預カル居ルモノナレバ、外出セシメベカラザルノミナラズ、若シ門ヲ出デ忽チ支那兵ノ捕縛スル所トナルベケレバ、靜カニ道台ト領事トノ間ニ其照会ヲ終リタル後、領事館ニ行クニ如カズトテ類ニ利害ヲ説キタリシモ、聽カズシテ門ヲ出ツルヤ直ニ守兵ノ為ニ捕縛セラレテ、支那兵營ニ送ラレ其牢獄ニ繋ガレタリ（支那ノ牢ニ日本人ノ入りタルハ之ヲ以テ嚙矢トス。愧ツベキノ至リ也）。是ニ於テ上海道台ハ日本領事ニ照会シテ、前夜来ノ事情ヲ報シ且検屍ノ立合ヲ求メタリ。由テ同日午後一時日本領事ハ医師ト共ニ馮氏ノ宅ニ至リ支那官吏ノ立合ノ上検屍ヲ為シタリ。該屍体ノ頭部ニ殴打重傷一ヶ所、刀傷凡十三ヶ所、死者ノ齡ハ五十余才ナリ。又加害者日本人三名ハ別ニ差シタル負傷ナシト云フ。」

此日彼三人ハ支那牢ニ夜ヲ撤シ、翌五日午後始メテ領事館へ護送サレ同館内ニ入舎シタリ。尤此中ノ一名七里某ハ前夜馮氏ノ宅ニ潜シ（支那兵ノ搜索ヲ避クル為地上ニ寐子蒿ヲ以テ其身ヲ蔽ヒ食ヲ絶ツコト一日、笑フベシ）居タリシガ、其翌々即六日ニ至リ上海縣道台ニ自訴シ、翌七日同ク領事館ニ護送サレタリ。領事館ニ於テハ昨八日午後豫審ヲ開クベキ筈ノ処、支那政府ノ請求ニ由リ更ニ今一兩日ヲ延期シタリ。又馮氏ノ実子一名ハ証人トシテ支那政府ニ引致サレタリ。豫審終結ノ上ハ多分重罪ト決スベク、然ル上ハ日本長崎又ハ其他ノ地へ移シテ其公判ヲ開クベキ筈ナリ。又当地居留日本人ハ右馮氏ノ不測ノ災害

ヲ蒙リタルヲ憐ミ若干ノ義捐金ヲ據出シテ之ヲ氏ニ贈リタリ。又生等ハ同縣ノ義務黙止スベカラザルニ由リ、一昨七日午後縣人一同馮氏ヲ問フテ之ヲ慰藉シタリ。○支那人ハ一時中々ノ激昂ニテ、日本居留人モ一時ハ城内ニ入ルコトヲ見合セ居リシ程ナリシモ、昨々ニ至ツテハ最早鎮靜ノ模様ナレバ、此後ノ心配ナカルベシ。

事實大略前記ノ如クナルガ、此事タル元來一ヶ人ノ私闘ニ過ギスシテ左迫意トスベキニ非サルニ似タリト雖トモ、近來人心洶々ノ際ニ当リ犬ノ喧嘩ヨリ三人ノ壯年ヲ以テ一人ノ老爺ヲ打殺シ、且其殺戮ノ残酷ナルガ如キ、誠ニ日本人トシテ、殊ニ前途ノ大望ヲ抱キ遠ク海外ニ在ルモノ、為スベキ所ニ非ス。之ヲ小ニシテハ其父兄親戚朋友ヘ非常ノ心配ヲ為サシメタルノミナラズ、大ニシテハ兩國国交ヲ傷ケ兩國人民ノ感情ヲ害セル等、其關係スル所誠ニ少小ナラズ。此等ハ仮令法律上ニ於テ其有罪無罪ヲ問ハス、實ニ愧ヅベク賤ムベキノ事ト云ハザルベカラズ。剩サヘ其一人ハ本縣人ニシテ一タビハ研究所内同窓ノ人タリシニ於テ、生等ノ殘懷ニ堪エザル所ナリ。然レトモ是亦一時ノ憤情ニ出デ事ヲ悞リタルモノニシテ、強チ其人ヲ棄ツベキニ非ズ。後悔蓋シ已ニ其胸中ニ充チタルナランカ。

右之事件ニ付、縣地新聞紙等ヘモ種々之記事ヲ記載シ、或ハ事實ヲ悞ル等モ事モ有之候節ハ、何卒乍御面倒、前書同様、縣廳ヘ御轉交供一覽被下度奉願上候。当地ハ前數日來降雨多ク、梅雨之氣味ニ御座候。御地方モ定而同様降雨有之申候事ト奉存候。本所其後異情無之、生徒一同日夜勉強罷在候。此比中、補充生廿名募集之廣告致候處、志願申込候者已ニ四五十名ニ及ヒ、猶續々申込有之候模様ニ御座候。今便ハ右而已申述度、當時下折角御自恵被遊候様奉遙願候。勿々敬具。 研究所 龍平 拜 七月二十日午後 野崎尊丈台覽

尚御賢弟、御令息ヘモ此書供御一覽被下度奉祈候。東京手嶋氏及御地佐藤領道氏ヘモ御無沙汰而已仕居候。御序之砌、可然御鳳聲奉願上候。

（封筒表）味野野崎氏ヘ白岩龍平ハ來翰

4 【明治二十四年七月二十二日付 野崎武吉郎書簡 野崎万三郎宛】

拜啓仕候。大暑ニ赴候處、倍御清健御文安被為遊御坐、奉恭頌候。陳ハ白岩龍平実兄左古武罷越、面話仕候。龍平身上ニ付、御配意被為成下候御厚禮申上度候間、御用繁中恐縮奉存候得共、御面會被為成下度、此段私ヨリ御願申上呉候様申出候ニ依リ、添書仕候。宜奉願上候。頓首謹言。 七月廿二日 野崎武吉郎（印鑑）「野崎」 野崎様御侍史

（封筒裏）野崎萬三郎様御侍史

（封筒裏）緘 児島郡味野村 野崎武吉郎 廿四年七月二十二日

5 【明治二十五年四月十九日付 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛】

恭啓、爾来ハ乍存御疎音ニ打過、懶謝此事ニ奉存候。春風艶冶之好時節、閣下益御清光、為邦家御鞅掌被遊御座候段、遙ニ想慕之至ニ不堪候。降而当所事、所長始一同瓦全脩学罷在候間、乍憚御放念被成下度候。客冬来ハ政海多事、各地共随分混雜之様子承及候得共、本縣ハ差シタル面倒モ無御座候趣、偏ニ知事公閣下御高明之致ス所ト窃ニ敬感罷在候。目下之形勢、来月御開院相成候臨時議會モ随分群議沸騰可致、畏多クモ聖上之御震憂モ嘸ヤト、在外之微臣野生等迄恐察仕候事ニ御座候。

當国ハ其後別段變動無御座、政事上ニ於テハ北辺ニ蹟扱致居候馬賊も去臘十二月ヲ以テ王師戡定之功ヲ奏シ、又彼教案ニ付歐州各国要求ノ談判モ申込之俟立消ノ姿トナリ、目下殆ント泰平謳歌之有様ニ御座候。只去二月初旬々西南部廣東省中之沢山ニ立籠居申候一揆ハ、目下已ニ官兵海陸々進戰之途ニ向居候へハ、追而平穩ニ帰シ可申被存候得共、該一揆ハ其旗ニ反清復明ノ四字ヲ書シ、諸大將ハ何レモ明朝之服裝ニテ、軍規嚴肅招徠方ヲ得、数万之衆ヲ擁居候而、中々勢力有之候様子ニ御座候。左程大事ニハ至リ申間敷候得共、各地人民ノ感情多クハ明朝ヲ慕ヒ、往々乱ヲ喜フノ風有之。滿州政府之為、可悲事ニ御座候。工業ハ依旧改進之勢相見エ不申、只鉄道敷設之議ハ朝野有識者之賛成有之候得共、目下ノ実行無覺東。尤張之洞氏之銳意企画致居事故、早速南北数千里ニ通ハ長蛇ヲ此大陸ニ走ラセ候ハ必然ト存申候。殊ニ北京々城々東方海岸ナル山海関ニ至ルノ鉄道

ハ、過般來已ニ着手致居候事故、追々清人之美利ヲ目撃スルニ至ラハ、旧來之迷想ヲ打破スルニ容易ナル様相成可申卜奉存候。

商業上ニ就而大略申上候ヘハ、近年清国ノ欧米ヘ向輸出致候重要品、絲茶ハ共ニ逐年衰頹ニ趣キ候得共、輸入之阿片も漸次減少致候為、僅ニ貿易平均ヲ相保居申候。日清間ノ交易ハ之ニ反シ、月々年々輸出入共其額ヲ加ヘ、就中マツチ洋傘等之工藝品ハ需要之増加著敷、將來之進歩想ヒ遺ラレ申候。当港市場ハ已ニ新聞紙上ニ於而御承知之通、東洋有名之香港上海銀行組合者ノ一人、八十萬兩ノ負債ヲ以テ逃亡致候為、一時恐慌ヲ起シ、未夕常態ニ相復不申候様子ニ聞及申候。

次ニ本所事、爾來日月之經過ト共ニ順序の進歩之姿ニ有之、昨年春夏ノ交少々世評ニ上リ候後ハ、生徒一同之團結ト親密相加、殊ニ渡航後最早一年半余も相立候事故、卒業迄之時日短縮致候ト共ニ一層自奮之氣相増シ、學術実地共ニ脩学ニ餘念無之、夫か為今日ハ当地居留邦人ハ申迄モ無之、外人中ニモ大ニ好評ヲ得候有様ニ立至候次第、乍恐縮御同慶被成下度候。本縣生徒、野生外四名、何レモ互ニ誘掖修養相励罷在候。殊ニ小生ハ申迄モ無之、甲田、景山兩人ノ如キ、昨年中不一方御高庇ヲ受候事、必ス御高眷ニ相酬候様仕度ト終始共ニ語合申居候。味野野崎氏ヘハ時々小生ノ通信罷在候。同氏之御懇切ハ今更申ニモ及ハサル儀ニ御座候得共、渡航後不絶御念書被惠、只管敬感、寢食之間モ御厚恩忘却不仕、萬一不十分之成業仕候テハ同氏ニ對シテハ勿論、第一閣下ニ對シ相濟不申ト、夫ノミ苦慮仕居候。鄙衷御賢察偏ニ奉希上候。所長事、商品取集等之任務ヲ帶ヒ近々之内再ヒ帰朝之筈ニ御座候。其節ハ錦地ヘ立寄相成候様依頼致居申候間、其砌萬事御聞取奉煩候。尤右ヘ重而御報可申上候間、左様御承知置被下度候。右不取敢時期御伺旁以乱筆如斯御座候。頓首不盡。 明治廿五年四月十九日夜認 龍平拜具

野崎賢臺閣下電鑑

尚知事公御出京中之由、御帰縣相成候ハ、乍憚可然御鳳聲奉願上候。

（封筒表） 大日本帝國 岡山縣廳／野崎萬三郎殿閣下／親展

（封筒裏） 緘／清国上海日清貿易研究所／白岩龍平 拜寄

6【明治二十六年八月十七日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

謹呈、酷暑之砌ニ御座候處、先以閣下御清泰被遊御起居、遙ニ奉南山候。却説、今般味野之來論ニ由レハ、突然御非職相成候由、甚以心外之至ニ奉存上候。在外之一書生固々其事情ヲ詳知不仕候得共、復旧工事も未タ完竣ニ不至、今度ハ又旱魃ノ災ニ而、瘡痍未タ癒エサルニ又此天變ニ遇ヒ、難局之支持殆ント想像ノ及ハサル所ニ有之可申、此際閣下之掛冠之報ニ接シ如何ニモ案外、為縣民深く失望之至ニ御座候。閣下も重望ヲ負フテ要地ニ處シ、其措置從來縣民之幸福ヲ増進スル幾許ナルヲ知ラズ。仮令今一ヒ去テ郷里ニ耕サル、モ、蒼生謝安ヲ謳フノ日蓋シ亦遠キニ非ルコト小生之確信スル所ニ御座候。願クハ他日再ヒ鞅掌之務ニ当ラレ候様、為邦家玉安自惠專一二被遊度不堪希望候。右不取敢所感之俣寸楮如此御座候。匆々敬具。 於上海 白岩龍平拜手 八月十七日夜 野崎老臺閣下升

過日ハ同志福原氏拜眉ヲ得、御多忙中御懇話ヲ蒙り候由、一同感喜罷在候。併而茲ニ御礼申上候。 龍平追啓。

(封筒裏) 日本帝國岡山縣邑久郡ノ野崎萬三郎殿ノ煩親拆

(封筒裏) 封ノ清國上海ノ日清商品陳列所ノ白岩龍平敬識ノ明治二十六年八月十七日發申

7【明治二十七年八月十六日付 野崎武吉郎葉書 野崎萬三郎宛】

謹啓、残暑難去御座候處、高館御揃益御多祥被為在御座、奉恭祝候。其後ハ御動履御伺之書状モ拜呈不仕、意外御無音打過候段、御海容可被成下候。陳ハ白岩龍平義、荒尾所長ヨリ至急歸朝候様トノ電報ニ接シ、本月八日上海乗船、十一日門司港へ安着、十三日晚小生方へ罷越、久々振面談仕候。一昨十四日夕出發仕候。同人宅へ立寄り、十七日、遅も十八日迄ニ着京ノ筈ニ御座候。実ハ尊館へ御伺可申上存意ノ處、上京差急候ニ付、御無音仕候。小生ヨリ宜ク申上候様申出候。右乍略儀以寸楮御報知申上度、如此ニ御座候。頓首。 八月十六日午前十一時發

（葉書表） 備前國邑久郡幸島村／野崎萬三郎様／備前國児島郡味野村／野崎武吉郎

8 【明治二十七年八月二十八日付書簡 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛】

謹啓仕候。爾来ハ久敷御疎音ニ打過、誠ニ申譯も無之、懶謝此事ニ奉存候。残炎尚酷敷御座候處、先以閣下始御満堂益御健勝被遊御起居候段、恐悦不斜奉存上候。陳は拙生儀、去月十二日復所ノ命ニ接し、卒業証書も拝領仕候處、早速書上ヲ以而御報知も不仕、野崎氏ハ御轉達相願候儀、甚以而失礼之段、不悪御諒恕被下度奉願上候。其後本月八日、突然東京荒尾所長之許ハ来電ニ接シ、俄ニ帰朝ノ途ニ上リ候事ニテ、其際モ亦一片之御報不申上候ノミナラス、出京差急候為、岡山ヲ瀛車ハ経過致候ニモ不拘、拜芝ノ榮ヲ不得、遺憾千万萬之儀ニ奉存候。実ハ久々ニ而帰朝仕候事ニも有之、旧来ノ御恩顧ヲ謝シ、并ニ留学中種々不届ノ事ノミニテ、不一方御配慮相煩候御厚礼申上、緩々御高教拝領仕度志願ニ有之候得共、何分目下之時勢、上京ノ時日も被差急候為メ其意ヲ果シ不申、残念之至ニ御座候。乍併味野へ一泊致、野崎本分御両家御主人様始、御家内一統ニ親敷拝眉ヲ遂ケ、久々ニ而岡山地方之近状等も承り、閣下之御近況も語り出、大ニ一夕之情話ニ五年ノ苦學ヲ忘レ候思ヒヲ成シ申候。小生出京後、当分之内、荒尾所長ト当所ニ同寓罷在申候。目下色々調査之事柄有之、徹宵致候事も毎々ニ而、着京以来寸暇無之、夫カ為一向愚札も不差出、不埒之至ニ有之、御高恕偏ニ奉願上候。

上海ノ方ハ其以来形勢益切迫致候様子ニ而、陳列所も一先閉館、一同長崎表へ取戻候旨、昨夜来電ニ相接し申候。甲田氏ハ漢口へ、河本氏ハ福州へ罷越居候間、其消息ヲ得不申候得共、福原・景山ノ両氏ハ上海ニ無事滞在、又高見氏ハ尚普陀ニ脩業罷在候。何レモ異状ハ無之候間、御心配被下間敷、右諸氏何レモ近々之内一旦長崎、或ハ国元迄引揚可申ト相察申居候。小生儀ハ当分ノ内ハ在京之心得ニ有之、前途處世ノ方法、并ニ野崎氏へ報恩之次第等ハ、何レ時機ヲ得而拝眉ノ上愚見陳述、御叱示相仰申度心得ニ有之候へハ、茲ニ陳述不仕候。千坂知事公ニハ過日一寸拝眉致候得共、御病中ニ而長談も不致、其後未夕參堂不仕候。日清ノ關係ハ最早斯相成候上ハ、如何程長引候共、又々風波ノ相起り不申候様、支那も朝鮮も相片附ケ置候事肝緊ニ有之可申。此上政府ノ方針さへ變動不致候へハ、戦後ノ日本ハ最早東洋ノ日本ニアラスシテ、宇内ノ日本ト相成可申、幸慶此

上もナキ事ニ御座候。只将来ニ恐ルヘキハ、英国ノ去就如何ニ由テハ局面ニ大變動相生可申哉。支那ハ頑迷トカ老衰トカ申候得共、尚英国ナドヲ擒縦致候ノ策ハ、我国ニ比シテ巧妙ナル處有之。此邊ハ我国人ノ深く戒心可致点カト奉愚察候。御高見如何ニ御座候や。御寸暇も御座候ハ、御示教奉仰候。右御疎音御詫旁婦朝御報知相兼、以乱筆得芳意申候。匆々拝具。八月廿八日夜十時 白岩龍平於東京 野崎賢臺閣下惠鑑

尚々郷里へ一泊仕候處、愚父分種々閣下ノ御噂仕、宜敷可申上申間候間、茲ニ奉聞仕候。荒尾氏分書面差上不申候得共、呉々も宜敷被申出候。

(封筒表) 岡山縣新立岡山銀行氣付ノ野崎萬三郎殿ノ煩親展

(下 札) 宛名ノ人縣下邑久郡幸島村ノ西幸西工帰宅中ニ付御轉送相ノ成度候也。岡山銀行

(下 札) ビゼン神寄局行(消印) 「備前ノ岡山ノ廿七年八月ノ三十一日ノハ便」

(封筒裏) 敬ノ東京芝区琴平町十三番ノ信濃屋方ノ白岩龍平藏

### 9 【明治二十七年九月十六日付 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛】

拝啓、過日ハ縷々御懇切ナル御示諭ニ接し、久々ニ而御面接ノ想ヒヲナシ、再四薰誦仕候。然ハ甲田松太郎君御紙面之儀、小生共ニ於而も驚人候外無之、乍併過日ハ漢口ハ歸朝致候友人分承及候ヘハ、客月下浣無事上海迄引取居候様子ニ付、左程ノ危険も有之間敷、又無謀ノ暴舉も旋ラスニ地ナキ有様ニ有之可申候。本月二日上海米國領事ハ日本人保護ヲ解キ候ニ付テハ、爾後本邦人、船便毎ニ歸朝、一切上海ニハ在留不致候筈ニ付、此頃ハ多分甲田氏も已ニ出發、歸朝ノ途ニ就カレ候事ト相信申候。茲ニ悲ムヘキハ同縣生福原林平氏ノ身上ニ而、氏ハ八月上旬間諜ノ嫌疑ニ依テ支那官吏ノ手ニ押ヘラレ、其後、米領事館中ニ拘留相成居候處、本月二日他一名ト共ニ居留地外ニ於而再ヒ支那官吏ノ手ニ引渡サレ申候。未タ虐殺ニハ逢ハサル様子ナレトモ、最早斯ク相成候上ハ十中八九迄生路ハ無之、誠ニ遺憾千萬ノ事ニ御座候。過日来屢々我外務省ニ就テ之カ救出ノ道相

講候得共、兩國宣戰ノ今日ニ当リ照会ノ道サハ無之、如何共難致儀ニ御座候。今一名岡山高見武夫ト申ス人、是亦普陀山中ニ於而同様ノ嫌疑ヲ蒙リ支那官吏ノ手ニ押ヘラレ候處、是レハ已ニ米領事ノ保護ニ歸シタルヤ、或ハ尚支那官吏ノ手ニ在ルヤ相分不申、是又大ニ心配罷在候。右二件ハ事実明白候迄ハ国元父兄ヘ申上候トモ却テ御驚愕ヲ招キ候迄ノミナレハ、今姑ク經過ノ上、安否共事実明白候上ニテ、委曲御報可申上覚悟ニ有之申候處ニ御座候間、左様御含置、他ヘハ相洩レ不申候様御願申上候。此他河本、景山ノ両君ハ久シク手書ニ不接候得共、何レモ安全、追々帰朝可被致筈ニ御座候間、御心配被下間敷候。小生儀も当地用向相終候上ハ廣嶺ヘ罷越候心得ニ有之、其節ハ改テ御報可申上候間、不取敢御推問ニ対シ拝答旁要用ノミ右申上候。尚此後共委曲ノ事実相分候上ハ、重ネ而御報可申上候。艸々敬具。 九月十六日夜一時 東京 白岩龍平 野崎賢臺侍史 取急不及他事、失礼ノ段千萬御用捨被下度候。

（封筒裏） 岡山縣邑久郡幸嶋村ノ野崎萬三郎殿ノ煩親展

（封筒裏） 敬 東京芝区琴平町信濃屋方ノ白岩龍平 緘

#### 10 【明治二十七年十一月三日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

拜啓、爾來御疎音ニ打過、懶謝此事ニ奉存候。小生儀客月五日東京出發、当地大本營ヘ罷越、滯廣中ニ有之申候。上海留学ノ同窓者ハ全国凡八十餘名、此度ハ一同通譯官トシテ從軍致候事ニ御座候。小生ハ大本營附ニ御座候得共、其内視察旁一度ハ戰地ヘ派遣相願候心得ニ御座候。

却説、福原林平氏非命ノ死ヲ遂ケラレ候段、誠ニ遺憾千萬ニ有之。然レトモ右ハ単ニ西洋新聞紙ノ報道ニ止マリ一向確實ノ報ヲ得不申、或ハ尚萬死ノ中ニ一生ヲ得居候哉も難計ト希望致候事ニ有之、旁以而世上ヘハ未タ公然發表不仕次第ニ御座候。兼而煩御配慮候甲田松太郎氏ハ客月十五日上海ヘ帰朝、其後一寸郷里ヘも帰省致候得共、尚上海ニ再渡之商用有之云々ニテ長崎迄罷越候處、再ヒ中止致候旨申越居申候。同氏も再渡ノ儀ハ危險千万ニ有之、且此際瑣細ノ商用ニ來往致候ハ一日モ早ク從軍

御志願相求候方可然、小生分懇々相勸メ、当地ニ於而ハ已ニ其手續ニ相連ヒ居候次第御座候ヘハ、用事相済次第来廣、拜命可致卜存候間、左様御安心被下度候。

又景山長次郎氏ニハ開戦後、其筋ノ内命ヲ含シテ北部視察ノ道ニ上リ、奉天・旅順地方ノ偵察ヲ終リ、万死ヲ冒シテ先月末無事帰朝、其功少ナカラズ。大本營ニ於而而栖川兩父子御宮殿下始、如將校ヘモ直ニ情状具申ノ榮ヲ得申候。御同慶被成下度候(秘密)。

又兼而清国福州ニ滞在中ナリシ河本磯平氏ハ同地ニ於而モ危険日ニ迫ルヲ以テ、香港ニ迂回シテ今朝無事廣嶋ニ来着仕候。景山・河本兩氏共明日一寸父兄ヘ面會ノ為メ岡山迄罷越、再ヒ来廣ノ上、第二軍ニ從征候仕合ニ御座候。又黒崎恒次郎氏ハ已ニ在清ノ我軍中ニアリ、高見武夫氏ハ一旦清吏ノ手ニ捕ヘラレ候得共、其嫌疑分明致候故、再ヒ普陀ノ山僧ニ預ケラレ候由ニテ、多分安全ニ可有之候。

又茲ニ喜フベキハ本日長崎分福原伴十郎氏特赦出獄ノ来電ニ接シ候事ニ御座候。同氏及緒元熊本兩名特赦ノ儀ニ付テハ、過般在廣知己同窓凡テ一百餘名連署ヲ以テ日清事件ノ今日、兩名ヲ獄ニ置カル、ハ可惜事ナレハ、特典ヲ施サレ度旨歎願罷在候處、此報ニ接して一同満悦之至、御同慶被成下度候。同縣ニテ遊清者ノ現状ハ右ノ如クニ有之。此際幾分力奉公ノ義務も相尽シ候道相開ケ、平生素志之一部も可被酬、何レモ感奮罷在候。

先般中ハ臨時議會ニ付キ、味野々崎氏も御来廣相成、御滞在中ニハ毎夕拜話ヲ得申候。今回ノ事件ニ付テハ是非共食塩ヲ清国ニ輸入ノ道相開キ国家永遠ノ大利ヲ企図致度、野崎氏滞廣中、御有志ノ會合等も有之、小生儀も在清中兼而心懸居候事故、清国塩政上ノ關係等取調ヘ、野崎氏迄参考ノ為差出候心得ニ御座候。此事ニシテ成ラハ、戦勝ノ結果トシテ洪大ナル国利ヲ興シ候事ハ申込もナク、野崎家ノ御利益モ小ナラズト奉存上候。本月中旬ニハ当地ニ於而右委員會有之候趣ニ而、野崎大人ニモ其節再ヒ来廣ノ筈、不遠拜之ヲ得可申ト相楽御待申上居候。荒尾精氏著対清意見一部、別封郵呈仕候間、御清閑ノ御一閱奉煩候。在京在寓中、小生ノ筆記致候者ニ御座候。是ハ御他言被下間敷候。右ハ御無沙汰ノ御詫旁友人共近状奉聞仕度如斯御座

候。艸々頓首。十一月三日夜三時半 天長節日大本營地ニ於而 龍平拜手 野崎賢臺侍史惠覽

深更取急キ乱筆不文、千萬御仁恕奉願上候。

（封筒表）岡山市岡山銀行氣付／野崎萬三郎殿／至急親展

（下 札）右名宛之者、当時本籍邑久郡幸島村西幸西へ帰宅ニ付、御送付相成度候。十一月五日 岡山銀行 「坂野」

（封筒裏）敬 廣島鳥屋町名月亭／白岩龍平 緘

## 11【明治二十八年二月十五日付 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛】

爾来ハ一向御疎音、多罪此事ニ奉存候。先日御親戚武田真三次氏御来廣、御近状等承及、益御精勝被遊御起居候段奉南山候。小生儀以餘光無事奉公罷在候間、乍恐縮御放念被成下度候。先達而ハ御書面被投、折節多忙ニ取紛、御札書も不差出、年初二も宮中御停式ニも有之、賀正書も不差出、其以来日夕公私之務ニ逐ハレ、乍不本意御疎音ノミ仕候。戦争日々好消息ヲ傳へ、殊ニ今回ハ丁汝昌艦隊ヲ率テ降伏、千載ノ快事ニ御座候。丁ハ今少シ見上ゲタ人物ト鑑定仕居候處、是ニハ案外仕候。是後、威海已ニ成功ノ上ハ我艦隊ハ別働隊ヲ編製シテ南方経略ニ向ヒ、台湾占領ノ見込ニ有之候由。是ハ尚秘密ニハ属シ居候得共、遠カラヌ内實行可被致。之二次テ渤海湾鮮冰ノ時期ヲ待チ、近衛・大阪ノ両師団ヲ以テ天津及山海関ニ向ハシメ、茲ニ一大野戰ヲ行ヒ、同時ニ大本營ヲ旅順ニ進ムル事ト相成可申。清国も其時期ニ及ンテ漸ク真正ナル媾和ヲ可申出、愈結局ヲ見ルニ至ルヘキカト奉存候。然レトモ戦争ハ常ニ意外ノ結果ヲ現ハシ候者故、如何共豫測ハ素ク難致候。兼而野崎氏初各当業諸氏ノ熱心ニ奔走被致居候食塩輸出之一條も愈輿論ノ容ル、所トナリ、両院へ建議提出之末、遂ニ昨日ヲ以而両院共可決相成候趣、昨夜来電欣悉仕候儀ニ御座候。此上ハ神聖ニシ而貴重ナル両院決議ヲ有効ナラシメン為ニハ、尚一層發起人委員諸氏ノ熱誠ニ由リテ、是非共此目的ヲ貫徹シ、一ハ以而出征將卒戰勝結果ノ一トシテ、一ハ以而國家經濟百年ノ長計ヨリシテ、永ク我食塩ヲシテ日清貿易ノ大宗タラシメンコト、拙生ニ於而も切望不措次第ニ御座候。

今般同志二三相謀り、出征者トノ通信連絡ヲ取ラン為、別紙ノ如キ方法相設ケ申候。通譯官トシテ陸海軍ニ加勢致居候會員人名も列記致居候ニ付、一部供覽候。御清閑之御仰御一閱候。河本磯平、飯塚松太郎、黒崎恒次郎、景山長次郎ノ諸氏ハ、何レモ第一第二軍ニ従フテ戦地ニ在リ、勇健ニ奉務被致居候。何レモ時々送信、閣下始諸前輩へ宜敷御宣達可申上旨被申添候。小生ハ其都度一々御報可申上筈ニ候得共、不果其意候間、谷川、香川、中川諸氏へ御出會之節ハ、此旨閣下ハ御傳達ヲ煩シ候。右寸楮得芳意度、多忙中乱筆、書不尽意、萬御諒恕奉祈上候。頓首敬具。二月十五日午後二時 大本營陸軍參謀本部ニ於 白岩龍平拜 野崎老臺座右

(封筒裏) 備前國邑久郡ノ野崎萬三郎殿ノ親展

(封筒裏) 敬 轉宿 廣嶋市天神町ノ大本營付山中旅館ノ白岩龍平 緘ノ明治二十八年二月十五日發同十六日着

## 12【明治二十八年四月八日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

拜啓、小生儀今般近衛師團ト共ニ出征從軍ノ途ニ上リ申候。凱旋迄ハ最早愚書不差出候間、左様御承知被成下度候。景山席太郎氏御見立被下、態々御出廣被下、小生ニ於而深ク感謝仕候次第二御座候。自然閣下ニ御面會申上度トノ御事ニ御座候間、此書拜托仕候。何卒御多忙中トハ奉存上候得共、御面接小生近状等も御聞取被下度候。扱又同氏令息長次郎君ハ兼而不一方閣下ノ御配慮ヲ煩シ候處、尔來能ク百難ニ堪エ在外中實母ヲ失レ、又水害ノ為一家盪産、家族離散ノ慘況ニモ不拘能ク其志ヲ不変、遂ニ今回ノ時變ニ際シテモ九死ヲ犯シテ王命ヲ奉シ其功勞不尠、小生共同縣生并ニ同窓者ノ深ク感謝致候ノミナラス、大本營ニ在テモ大ニ満足ニ被思召候次第二而、閣下御高慮ノ程も空シカラス、御同喜被成下、尚席太郎氏へハ更ニ將來ヲ励マサレ候様奉冀望候。出陣前一同多忙ニ而書不尽意、乱筆ヲ不顧幸便ニ托シテ一書如此ニ御座候。艸々頓首。四月八日午前十時 認 龍平拜具 野崎老臺惠覽

(封筒裏) 岡山ノ野崎萬三郎殿 升啓ノ景山席太郎氏袖呈

（封筒裏）廣嶋ニ於／白岩龍平／明治二十八年四月十四日到達

13 【明治二十八年六月十一日付 野崎武吉郎葉書 野崎万三郎宛】

拝啓、薄暑之候ニ御座候處、尊館御揃益御清祥被為在御坐、奉慶賀候。其後ハ打絶御書問モ不申上、御無音而已打過、不本意之至、恐縮奉存候。去ル九日国清寺ニ於テ三士追悼會之節ハ御出會、御苦勞ニ奉存候。小生義ハ不参欠敬仕候段、御海容可被成下候。陳ハ昨日午後四時五分馬関發電信ヲ以テ左ノ通り白岩龍平ヨリ報知致来り候。「ブジイマツイタ」。此旨御報知申上候。右得貴意申上度、乍略儀以端書如此ニ御座候。時下折角御自愛專一ニ奉祈候。頓首。六月十一日午前九時發。

（葉書表）備前國邑久郡幸島村／野崎萬三郎様／備前國兒島郡味野村／野崎武吉郎

14 【明治二十八年七月二十六日付 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛】

拝啓、爾来ハ御疎音ニ打過、多罪奉謝上候。時下炎暑之砌ニ御座候得共、兎角冷熱不定ニ有之候處、先以閣下始御満堂益々御壮栄被遊御座、奉敬賀候。却説、過般ハ清国ノ婦朝、味野ノ婦省之途次、御高館江拜趨仕候處、穴憎未夕御帰縣無之、御目ニ掛り得不申、千萬遺憾之至ニ奉存候。六年振ニテ緩々御高話拝聴、且小生身上ニ付テ将来ノ事抔も篤卜御賢慮ヲ伺上度卜存候處、残念ニ存候。又今回ハ味野ノ塩業ノ儀ニ付出張可致旨被申越、罷出候得共、京都へ参り候用向非常ニ切迫ニ而、又尊邸へ罷出候事ヲ不得、途中、閑谷ニ西翁ヲ訪ヒ直ニ入洛仕候始末、御諒恕被成下度候。

味野大人ニハ先般分家定次郎氏ト共ニ荒尾氏ヲ訪ヒ、同家顧問トシテ小生ヲ招キ度御協議有之候趣ニ而、不肖之小生ヲ斯迫も厚キ御思召被下候段ハ、御高義之至、何時も乍ら小生ニ取り感激之外無之奉存候。乍去斯ル重大ナル任務ハ若年ニシテ経験ニ乏數小生ノ能ク当ル所ニ無之、殊ニ折角思立、御恩顧ニ由リテ是迄研究ノ功ヲ積ミタル日清貿易も今後コソ初而實務ノ舉カリ候時機ト相成候次第ニも有之、成否ハ兎も角諸同志ト共ニ誓而初志ヲ貫徹シ、今回殉難之諸子ノ志ヲ成シ度熱望ニ有之、荒尾氏ニも其段同意ニ而先以而今数年の間ハ日清間ノ公益的國家事業ニ尽瘁致シ、其間味野ニ於而御用向有之候節ハ何時タリトモ

御呼寄被下候へハ、何事ニ不限微力相尽候事ト被成下候様仕度旨願出候處、味野大人ニも至極御同意ニ而心能承諾被致、仮令外ニ在リテ公供ノ事ニ従事スル共、家政其他二付キ隨時御下問等も可有之旨被仰聞、小生身上ニ取り誠ニ冥加至極ニ奉存候。此後ハ今一段ノ奮發ヲ以テ駑駘ニ加鞭、他年ノ大成ヲ期シ自奮罷在候。閣下ニハ從來不一方ル御配慮ヲ蒙り来リ候次第ニ而、此儀も實ハ御高見相伺候上ニ而卜存、御伺申上候次第ニ有之候得共、前述ノ成行、御賢察ヲ被為垂、向後ハ乍此上萬事御心添伏而祈ル所ニ御座候。

荒尾氏も至極丈夫ニ而勉強被致居申候。小生も再渡未定ニ付、當分ノ内当所ニ滞寓、姑クハ讀書靜養仕度心得ニ御座候。此地市中ハ虎疫到來致居候様子ニ御座候得共、当山中ハ古來流疫等之浸入無之由村老衆語出候有様、屋後ニハ飛瀑杯も有之、暑中ハ殊ニ清涼相覺申候。御地方ハ虎疫も無之候哉、伺上候。當時同志中、景山氏へ台湾ニ、河本氏ハ台北ニ、甲田氏ハ遼東ニ、黒崎氏ハ郷里ニ散在致居候。戦局已ニ終リ將士凱旋ノ今日、終ニ還ル期無キモノハ彼ノ福原、高見ノ両氏ニ御座候。痛絶ニ不堪候。臺灣も案外ノ抵抗、殊ニ近衛師團之如キ、殆ント半数ハ死傷病者ト相成候有様、忠勇精銳ノ士ヲ風土氣候ノ為メニ陸續相失候事呉々も為國遺憾千萬ニ奉存候。右上下後直ニ御報可申上筈之處、延引ナカラ一書得芳意度、併而御近安奉伺上候。尚乍末筆御令聞へ過日參堂ノ砌ハ種々御厄介相成候段、宜敷御札申上候旨、御通聲奉煩候。艸々稽首。七月廿六日夜 洛東幽居於 白岩龍平 野崎賢臺侍史

追而荒尾氏今宜敷申上候様被命候。

(封筒表) 岡山縣備前国邑久郡ノ野崎萬三郎殿ノ台展

(封筒裏) 封 京都鹿谷若王子神社ノ荒尾様方 白岩龍平ノ明治二十八年七月廿九日披見

15【明治二十九年六月十六日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

杜鵑啼血之候ニ御座候處、益御清泰被遊御起居候段、奉遙賀候。降而野生儀客年十一月再渡後各地巡遊ニ耽り、居處も一定不

仕、旁彼は御疎音ニ打過申候。此度ハ四川省ノ奥地迄罷越度心得ニ而本邦ヲ出發致候得共、故アリテ不果其意、爾來杭州ニ一度、蘇州ニ兩度、漢口ヘハ三度往復、半年餘之日子殆ント路上舟中ニ相暮シ候有様ニ御座候。再渡ノ目的ハ単ニ新開港地視察ノ心得ナリシモ、戰後ノ機會ヲ失ハズ、此際商工業ノ基礎ヲ立テ置ク事肝要ト相考候ニ付、其見込ニ而經營相試居候仕合ニ御座候。過般、友人宗方小太郎氏ト協同、漢口ニ於テ而漢報ト題スル一新聞紙發刊致候如キモ其一端ニ御座候。目下、上海ニ於テ一小基礎打立度、折角經營中ニ御座候。只卑才淺學、百事志望餘リアツテ容易ニ成效ヲ期シ難ク、自ラ省ミテ慚媿之至ニ不堪、御憐察被下度候。清國戰後ノ形勢ハ殆ント累卵之危ニ似タリ。朝野官民更ニ發奮自勵ノ心ナク、政事ハ商工業ニ至ル迄一ノ見ルヘキモノ無之、最早此上ハ手ヲ拱シテ世界列強國之分ケ取りニ任スヨリ外無之奉愚存候。而モ此分ケ取ハ多年ヲ要セスシテ、今後一朝東洋ニ事アルノ日ハ、即其時機ニ御座候。本邦ノ之ニ対スル計畫準備ハ、實ニ目下ノ急務ニ御座候様奉存候。荒尾氏本年早春一度來滬ノ後直ニ歸朝、目下尚京都ニ在住、近々之内一度臺灣ヘ出張之心組ニ有之候旨報知有之候。本縣同志中、景山、黒崎ノ兩人ハ臺灣總督府ニ、河本氏ハ過般歸朝、甲田氏ハ臺北ニ在住ノ由ニ御座候。福原、高見ノ兩人ハ節ニ殉シテ芳名ヲ史上ニ垂レ、景山初辻生等迄過般從軍ノ恩典ヲ録賜セラレ候儀、偏ニ當時千阪翁、閣下初、諸先輩有志奨励ノ餘光ト一同感佩罷在候次第ニ御座候。福原、高見兩人遺骸も今度我外務省ハ處刑地方長官ニ照會ノ筈ニ相成居候間、不遠當時ノ實況并ニ遺骸等も判明可致被存申候。

過日、野崎武吉郎氏來諭ニ接シ候處、御養嗣續太郎氏酒癖之為將來改悛ノ見込も無之、断然離縁被致候趣、萬々不得已ル御儀ト奉察候。又新定家憲告示式、來九月初旬舉行相成候趣、小生も當方ノ模様ニ由リ可相成ハ其際一旦歸朝、右式斑ノ末ヲ瀆シ度心得ニ御座候。若シ其砌帰朝ヲ果シ不申候節ハ、來春勿々ニハ是非共一度帰國仕度存居申候。其節ハ必ス繰合セ拜芝ヲ得而緩々御高教ヲ領シ度切願ニ御座候。書不尽意、総而御賢察ヲ祈り候。頓首拜具。六月十四日夜 龍平 野崎老臺侍史

（封筒表） 大日本岡山縣備前國ノ邑久郡ノ野崎萬三郎殿ノ台展

（封筒裏） 封 清國上海 日清商品陳列所ノ白岩龍平ノ明治二十九年六月十八日着

16 【明治二十九年八月二十六日付 白岩龍平書簡（写） 野崎武吉郎宛、および明治二十九年九月四日付 野崎武吉郎書簡

野崎万三郎宛】

（在上海白岩龍平書狀写）

謹啓、八月二日付御惠翰、同十四日到達、難有奉拜誦候。先以御満堂御精康御座被遊欣祝此事ニ奉存候。小生儀御餘光ニ依り碌々無恙罷在候間、乍憚御休慮被成下度奉願上候。却説、先般御送呈仕候當國食塩見本ハ、早速塩業協會へ御寄贈且鎌田氏へモ少々御頒相成候趣、御用ニ相立、本懷此事ニ奉存。尚追々遊歴者知人等ニ相托シ、各種収集仕度愚存ニ有之申候。

御家法モ愈九十餘條ニテ完成相成候趣、追而野生へモ該謄本御下付可被下旨、敬承仕候。平時ニ於テ篤卜研究致置度奉存候ニ付、右御抄寄之儀偏ニ奉希望候。

過般來書面ヲ以而申上候通、當地今蘇州杭州ニ通スル航海小蒸瀛船會社組織任、愈實行ニ着手仕候處、支那地方官ノ頑固ナル抵抗支障ニ由リ、隨分面倒ニ有之申候。然レトモ微力ノ及フ限りハ飽迄勇進仕候覚悟ニテ、目下専ラ経営中ニ有之。遅クモ今ヨリ一ヶ月内ニハ上海道台ト当地総領事トノ談判モ結了、通航ヲ見ルニ至リ可申。蘇州ノ地方官ガ加ヘ候抵抗モ其比迄ニハ氣焰ヲ殺キ候事ト豫測罷在候。何分ニモ新開港場ト云ヒ新事業ト云ヒ、且ツ同地ニ於テ貿易ヲ開始スルハ目下ノ處先小生一人ノ有様ニ御座候へハ、多少ノ困難ハ最初今豫期致候處ニテ今更驚キモ不在、此荆棘ヲ打開キ百難ヲ排シテ商路ヲ支那ノ内地ニ開拓スルハ小生共平素ノ志望ニモ有之、困難ノ加ハル毎ニ一層ノ勇氣ヲ鞭チ居申候。御配慮被下間敷候。只年少氣鋭、加之菲才浅学、經驗ニ乏シク、僅カニ斯ノ一小事ヲ企テ、尚速ニ其好成绩ヲ見ルコトヲ得ス、自ラ顧ミテ媿赧交々至リ候。迂生性質等ニ付テハ、閣下ノ御熟知相成居候處ニ有之、幸ニ御公餘時々御訓誨御叱教ヲ蒙リ度、切望之至ニ御座候。資本ハ先般書中申出候如ク、先四萬兩（我六万円足ラズ）ニテ、小生六年ノ親友清人姚氏其大株主トナリ、他ニ二名許入株、小生ハ百分中二十分ヲ醸出致候約束ニテ、右ノ二十分モ該姚氏今小生へ貸与候様次第ニ御座候。裏面ハ如此組織ニ候得共、

表面ハ全ク小生一ケノ營業ニ相成、名義ハ素ガ實際ノ事務モ皆小生一人ガ総攬罷在候儀ニ御座候。右四萬両ノ内、今日迄ニ拂込タル金一万五千両ニテ、是額ハ直ニ之ヲ當地ノ正金銀行ニ預ケ、同行ト来往取引相開キ、此金額ニテ小蒸氣二隻（八千両）購入ノ外、新ニ二隻及引舟等ヲ注文シ、并ニ一切ノ創業ヲナシ、目下已ニ準備全ク整頓致居候儀ニ御座候。上海ニハ當廣東路ニ事務総局一所ヲ置キ、小生此中ニ住居、別ニ荷客取扱所一ヶ所ヲ設ケ、蘇州ニモ同分局ヲ設置仕候。

蘇州ノ排外運動ハ、地方官吏ノ惡戯ニテ人民ノ感情ヲ害シタルニ非ス。人民ハ寧ロ外人ノ貿易ニ來ルハ其地ノ繁榮ヲ來スナリトテ好意ヲ表シ居候。サレハ外務ノ力サヘ強硬ニ行ケハサシタル前途ノ困難ハ無之候。サレハ此開航業ノ成ラントシテ躊躇セルハ右等排外運動等ノ為ニハ非スシテ、上海道台ニ於テ尚種々ノ口實ヲ設ケテ馬関條約ノ實行ヲ遲緩ナラシメント勉メ居ルカ為ニ御座候。尤此方モ珍田總領事等ノ談判ニテ追々撈取、遅クモ來ル十月一日ニハ開通ヲ始ムル事ヲ得ル様相成居申候。

右ノ次第ニテ、蘇州ノ排外運動等ノ為此業ノ成立タサルニモアラス、又談判ノ結果ハ遅クモ右十月一日迄ニハ實行ヲ見ルニ至ルヘク様相成居申候間、困難ナカラモ成立ハ可仕、飽迄勇進ノ心得ニ御座候。日本内地ノ新聞等ニ追々書立可申記事モ色々ニ誤聞ヲ相傳可申ト奉存候ニ付、茲ニ縷述、閣下ノ明鑑ヲ請ヒ置度候。營業開始後ハ其模様委細御報告可申上候。競争者餘リ多クサヘ無之候ヘハ、相當ノ利潤モ有之候見込ニ御座候。

以上ノ仕合ニテ、此間創業ニ全力ヲ盡シ居申候際ト云ヒ、彼ノ九月中旬ヲ以テ御發布相成候御家憲公布式ニ末班ヲ汚スノ榮ヲ辱スルコトヲ得不申、心中ノ遺憾不尠奉存候ヘ共、何卒愚衷御憐察、百御諒恕之儀偏ニ奉希願候。尚小生今回企画ノ同事業ニ付テハ、御分家御主人ヲ初メ、野崎旧參事官、田邊、手島両契ハ勿論、其他格別遙ニ御高慮ヲ勞シ居候儀ト奉察上候間、何卒閣下ガ隨時實狀御傳述、御配慮ヲ謝シ被下候様仕度、平生ノ御厚顧ニ對シ不憚御願申出候。右要用ノミ得御意申度、尚殘暑不佳人、為公為私、御撰養專一二奉禱候。頓首敬具。 明治二十九年八月廿六日 白岩龍平 野崎大人閣下侍史

追而、以來ハ表記、上海英租界廣東路第十二号大東新利洋行鄙名宛、御惠翰奉願上候。

拝啓、秋涼之候、益御清祥被為在御座、奉恭賀候。其後ハ御文音モ不仕、御疎濶而已打過、不本意之至、御海容可被成下候。過日ハ武田様へ御懇篤之御傳言被成下、難有奉深謝候。陳ハ在上海白岩龍平ヨリ必ラス親展ヲ以テ別紙寫之通申來候。此段御報知申上候。右得貴意申上度如此ニ御座候。時下御自愛專一二奉祈候。草々頓首。 九月四日 野崎武吉郎 野崎様御侍史

(封筒裏) 備前國邑久郡幸島村／野崎萬三郎様／御親展

(封筒裏) 在上海白岩龍平書狀写在中／備前國兒島郡味野村／野崎武吉郎／明治二十九年九月四日午後五時／六日到着

17【明治二十九年十一月十三日付 白岩龍平書簡(写) 野崎武吉郎宛、および明治二十九年十一月二十三日付 野崎武吉郎書簡 野崎万三郎宛】

拝啓、其後御疎音ニ打過申候處、愈御精采、御一同御安康被遊御起居候段、恐悅此事ニ奉存候。陳ハ客月三十日午後第十時、荒尾精氏台湾ニ於テ長逝被致候儀、已ニ新聞紙ニテ御承知之通ニ有之、誠ニ以テ驚泣ニ堪エサル次第ニ御座候。小生ハ誠ニ殆ント生父ヲ失ヒタルノ感有之、遺憾無限候。先月十一日書留郵便ヲ以テ長々シキ一書ヲ台湾ヨリ投セラルモノ小生ニ對スル氏ノ絶筆ニ御座候。真影ヲ眺メ絶筆ヲ展ヘテ既往ヲ回想シ欽泣仕候。野人之心事御推察被下度候。昨日、台湾友人ヨリ寄來致候書翰ハ能ク臨終病床ノ詳ヲ悉シ居候ヘハ、左ニ抄出仕候。

(前略) 先生九月二日当地ニ御來着以來、台湾統治策ヲ御講究傍ラ、東洋土木会社製腦事業ニ種々御尽力被遊、且ツ土人ト内地人ト親睦ヲ重ヌル為、一協會ヲ興シ專ラ御奔走中ノ所、略ホ其緒ニ就キ候間、去月廿六日当地御出發、台南巡視ノ上一応当地ニ歸り、南部清國各港ヲ經テ御歸國豫定ノ處、廿三日頃ヨリ少々悪感ノ氣味ヲ感セラレ候。二十四日同窓生十名余り会合シ送別会ヲ東館ニ開キ候。先生ハ少シ頭痛ノ氣味アリトテ少シ早く御歸リニ相成候。其翌日ヨリ發熱シ、マラリアノ徵アリテ熱度次第ニ上リ、廿六日頃ヨリ四十度ニ上リ下ラズ、重病ノ体ニ見エ候間、同窓生五六名ニテ昼夜御介抱申上ケ交代徹夜致候ヘ共、日増シニ重症ニ趣キ熱度毫モ下ラス、下痢嘔吐ヲ催シ食欲減少致シ、ソツプ、ミルク位少シ御

食ヒ相成候。廿七日午後分謔言ヲ發セラレ候。或時ハ端座對清策並ニ東方策ノ御演說被遊候。演說ハ始終其順序ヲ失ハス正確ノ体ニ相見ヘ候得共、暫時ニシテ隣ノ部屋ニ松方大臣カ御入来セラレタリ、氏ハ余ノ大恩人ナレハ病氣ニテ死スルモ不嫌、袴ト羽織ヲ出スヘシナド申サレ、種々面白キ謔語ヲ發セラレ候得共、重ニ東洋策ニ御座候。此日ヨリ人事不省ノ有様ニテ、皆々心配致候。其翌廿九日医師愈黒死病トノ診斷ニテ、其筋ニ届出テ、同日午後六時半避病院ニ御入院被遊候。看病人トシテ特別ノ許可ヲ得テ後部・内村両君同伴致シ、我々ハ制規ニ依リ門外ニテ消毒ヲ受ケツ、入院後ノ病情ヲ聞キテハ直ニ同志ニ報告致候。其翌日ニ至リ少シ快方ニ御座候處、午後分俄然變ヲ起シ候間、我々氣問ヒ門前ニテ始終立番致シ模様ヲ兩人ヨリ聞居候處、同日午後十時十分愈御逝去被遊候。（中略）人事不省ノ為、遺言は一言モ無之、死ニ瀕スル迄東洋策ヲ小言ニテ御演說相成居候云々。

讀之去テ飲泣ノ外無之候。今便ニテ色々他ニモ申上度候ヘ共、右葬儀ニ関スル在上海同志中ノ協議、其他ニテ多忙相極居申候間、此書何事も不申上候。尚此旨ハ乍失礼野崎旧参事官、手島・田辺両氏へも御轉覽奉願上候。敬具。 廿九年十一月十三日

龍平拜白 野崎大人閣下左右

追テ、小生ハ過日来杭州地方ニ罷越、数日前漸ク帰申、為ニ此書モ大ニ延引仕候次第二御座候。

拝啓仕候。過刻愚札一封相認投郵仕候處、四日午後第十時御認懸ノ御書面ニ相接シ、忙手捧讀仕候。荒尾氏死亡ニ付、早速御懇摯ナル御吊詞ヲ賜リ感激之至ニ御座候。小生計営中ノ事業も此計ニ接シ關係スル處不淺、偏ニ心配罷在候。都合ニ由リテハ不日一応帰朝可致哉も難計存居申候。

別紙吊詞謔写之上、左右ニ致候間、前書ト共ニ野崎参事官、手島、田邊諸台へ御傳覽奉願上候。家郷ヨリ捧呈致候勲章、公債、御預り証等三品、御返送被成下候趣、難有奉謝上候。右重テ一書得芳意、御拝酬申上度、如此御座候。頓首。

明治廿九年十一月十三日 龍平拜手 野崎大人台覽

## 吊辭

明治二十九年十月三十日ハ如何ナル日ソヤ。嗚呼明治二十九年十月三十日ハ如何ナル日ソヤ。我荒尾先生ハ実ニ茲日ヲ以テ台湾驕旅ノ中ニ長逝セラル。死生有命、人力ノ如何スル能ハサル所ト云フト雖トモ、抑モ亦已ニ降スニ斯人ヲ以テシ、任スルニ斯事ヲ以テシ、旋テ忽然之ヲ奪フ。彼蒼々タルモノ果シテ何ノ意ソ。嗚呼彼蒼々タルモノ果シテ何ノ意ゾ。摩頂放踵、先生ノ心血ハ東方ノ為ニ結成セラル。一絲ノ髮モ東方ナラサルハ莫シ。孔席墨突、先生ノ心血ハ東方ノ為ニ尽瘁シタリ。一言ノ微モ当方ナラサルハ莫シ。然而シテ坎坷鬱勃、磅礴タル滿腔ノ経綸、未タ聊カ施スニ及ハス、一片忠孝ノ志ヲ抱テ空シク世途彷徨ノ中ニ斃ル。今ヤ東方日ニ多艱、邦家ノ前路容易ナラス。一死豈敢テ斯人ノ為ニ惜マンヤ。寔ニ東方ノ為ニ之ヲ悲ミ、東方ノ為ニ之ヲ吊ス。

某等先生ノ門ニ在ルコト多年、親シク其薫陶提撕ヲ受ク。魯鈍ヲ鞭ツテ亦敢テ東方ヲ以テ平生ノ念ト為セリ。今先生ノ訃ニ接シ、奔テ葬儀ニ追陪スルコトヲ得ス。憾ヲ懷クコト誠ニ多シ。肅ンテ文ヲ備ヘテ敬シク先生ノ靈ニ告グ。不肖某等ノ先生ノ靈ニ對フル所以ノモノハ、但平生先生ノ教ユル所ヲ以テ平生ノ志ト為ス而已。海波漫々雲山飄渺、望眼東ヲ穿ツテ迷夢南ニ迷フ。嗚呼逝ク者ハ終ニ喚フヘカラサル坎、其レ終ニ起スヘカラサル坎。在上海某等謹テ白ス。

明治二十九年十一月十三日

右東京葬儀事務所へ宛、在上海一同ヨリ送りタル吊詞ニ御座候。

拝啓、寒冷之候、益御清祥被為在御坐、奉恭賀候。御無音而已打過、不本意之至、御海容可被成下候。陳ハ在上海白岩龍平ヨリ書状差越候ニ付、写別紙差出申候。御覽可被成下候。荒尾氏台湾ニ於テ黒死病ニ罹リ遂ニ死去被致、実ニ為國家惋惜痛悼ニ堪ヘス候。右得貴意申上度、如此ニ御座候。頓首。十一月廿三日 野崎武吉郎 野崎様御侍史

（封筒表） 備前國邑久郡幸島村／野崎萬三郎様／御侍史

（封筒裏） 備前國兒島郡味野村／野崎武吉郎／明治二十九年十一月廿三日午後三時／同廿五日着

18 【明治二十九年十二月十八日付 野崎武吉郎書簡（田辺為三郎筆） 野崎万三郎宛】

拝啓、冬令之候、愈御堅勝奉賀候。小生去十五日入京仕候。過日は白岩氏之件に付、武田君へ御傳語被下、同氏之為に色々御配意被成遣居候由、小生も感佩之至に奉存候。頃日入京に付、或る外務省などに頗る勢力ありて世故に通じおらる、某君に面会仕り、竊に白岩氏之今日之困難救済之策と其前途とを相談仕見申候處、某氏之言には、其精神ハ愛すべきも、其無謀輕率に至ては絶言語候事にて、外務省も其内情は能く承知致居候が、実に困つた事を始めて呉た事に候。其組合居る支那人ハ支那人中でも尤も人柄宜しからざる、云ハばラレズ者にて、前途白岩が之れが為に困難之地に陥るならんと認め居候。折角外交問題として強硬手段も取りて勝利に帰せしも、実は不本意の事にて、全く支那人へ名と權利を貢ぎし譯にて、残念に外務省は思居候。支那政府も既に此内情は承知致し居、其支那人を自国之者ながら憎み居る風に候。今日之策は一応白岩氏帰朝して前途之方針相立てる外は有之間敷、此儘にて進行せば前途愈困弊可致見込、且西洋人なり支那人なりの競争も可有之、中々容易之業に無之故に、十分基礎を固め、相当之資本を注入せざる可らず云々と申され候。如何御考被為遊候乎。此話によれば、外務省も餘程心配して困つた事を為し居ると認め居られ候趣、一応帰朝を勧めては如何可有之や。内々御参考迄に申上候。書外は拝襟に申残候。時下御自愛可被遊候。草々。十二月十八日 野崎武吉郎 野崎様坐下

（封筒表） 備前邑久郡幸島村／野崎萬三郎様／御直披

（封筒裏） × 東京市麴町區五番町拾四番地／野崎武吉郎／明治廿九年十二月十八日午後八時／同月廿一日着

19 【明治二十九年十二月三十日付 白岩龍平書簡（写） 野崎武吉郎宛、および明治三十年一月十五日付 野崎武吉郎書簡

## 野崎万三郎宛

(白岩龍平来状写)

拝覆仕候。十二月十八日付東京今御發之御芳翰、去二十七日來着、難有奉拝誦候。無事御着京、依例帝国議院御開院、御出席相成候趣、奉敬賀候。却説、過般野崎旧参事官宛願出候件ニ付、種々御高慮ヲ煩シ、恐縮之至リニ奉存候。御上京後、某先輩ニも御謀被下候趣、尚又夫ニ付御意中之微旨御示シ被下、一々奉敬承候。野生ニ於而も尔來彼是苦慮罷在候。御垂教之如ク一旦帰朝、其向々之官民有志ニ相計リ候事尤可然トハ奉愚存候得共、何分創業未タ半ナラス、百事小生一人ニ而指揮罷在候事ニテ、今日之處當分何共手離シ兼候次第ニ御座候。

邑久野崎氏ハ、去十七日付岡山今御書面被投候処、小生之委嘱ニ対シ直ニ出岡、花房端連翁、河野知事、杉山岩三郎氏ヲ始メ、備前七紡績會社各重役、并ニ前商船會社々々長河原信可氏等へ協議、何トカ小生事業ヲ擴張スル様助力致度トテ彼是方法御協議中ノ由ニテ、追テ何分ノ報知ニ及フヘキ旨被仰越申候。因而野生ハ再ヒ旧参事官宛、何分ニモ右諸有志ト御熟議、何トカ方法ヲ講セラレ度切願ニ有之候旨、拝答致置候。御含置被下度候。

本年ハ兼テ不面白ル年柄ニ有之候処、申年モ愈去リテ、芽出度酉年ノ新年ヲ相迎ヘ候事ト相成申候。当地ハ十二月二十三日冬至之日ヨリ三日間許、俄ニ劇寒ニテ、降雪ハ不致候得共、河水氷結、蘇州航路ナドハ二日計停航致候程ニ有之申候。右得御意度、歳末略書、不及餘事候。頓首敬具。 十二月三十日 白岩龍平拜 野崎大人閣下侍史

皇太后陛下崩御被為遊候段、誠ニ以テ恐入候御儀、御同哀ニ奉存候。謹言。 一月十五日 野崎武吉郎 野崎様

追啓、舊臘ハ武田様御婚姻首尾能被為濟、千鶴萬龜、芽出度奉慶賀候。其節ハ茅屋ヘモ御訪問被成下、難有奉深謝候。不在中失敬之段、御海容可被成下候。右乍延引御歡且御挨拶申上候。頓首。 一月十五日 野崎武吉郎 野崎様御侍史

尊翰拝讀仕候。如命甚寒ニ御座候處、益御清嘉被為在御座、奉恭賀候。陳ハ白岩一条、其後毛色々御配意被成遣候趣、縷々御来示拜承。同人ヨリ小生へモ過日来書有之、御厚誼之程喜居候。小生儀此度之御大喪ニ付、俄ニ上京仕候事ニ相成、明十六日出立仕候。就テハ前後多忙、細々御請不仕候。白岩来翰写、別昏呈覽候。餘ハ後郵ニ付シ候。時下御自愛可被遊候。草々頓首。一月十五日 野崎武吉郎 野崎様御侍史

（封筒表） 備前國邑久郡幸島村／野崎萬三郎様／拜復御親展

（封筒裏） 備前國兒島郡味野村／野崎武吉郎／明治三十年一月十五日午後五時／同十七日着

## 20 【明治三十年一月十日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

謹啓、愈御清穆奉遙賀候。陳は旧臘十七日付御芳書ニ接シ、同二十九日付愚札拜呈仕候處、已ニ御披閱被成下候御事ト存上候。其後引續キ不容易御配慮相蒙居候儀、乍隔地奉恐察候。扱蘇州杭州両地ト上海間郵便物通送之儀ニ付、兼而上海郵便局長ヨリ具申有之候處、今般御裁可相成、通信省ニ於而敝洋行ト別紙之如キ約定取結フヘキ様確定致候。此約定ニ拠レハ、通信省ヨリ年額二千四百弗下附可相成筈ニ而、郵便物通送料トシテハ尠カラサル金額ト奉存候。同省ニ於而も馬関條約之實行上ヨリ、又通信事業上我船舶航通之必要ヨリ特別ノ處置相成候者ト相覺エ、敝方ニ於而も營業之信用上誠ニ面目之至ニ有之、早速本約定履行之心得ニ御座候。元来、通信省ニ於而右下附之精神ハ杭州線路新開ノ保護ニ充ツル考ニテ、毎週一回ノ往復ニテ月額二百円ニシテ、若シ全ク郵便物ノミ運送致候節ハ勿論經費不足ニ候得共、多少荷客ヲ受候ヘハ計算相立候目論見ニ御座候。尤他ノ支那會社ニ於而已ニ日々ノ往復致居候事故、当方も是非共毎日、又ハ隔日ノ出帆トセサレハ十分ノ營業出来得難キ次第ニ御座候。又右杭州郵便線路相始候ニ付テハ、不取敢瀛船一隻ヲ雇入て之ニ差向候心得ニ御座候。

前陳之次第ニ而杭州も是ヨリ擴張ニ力ヲ相用申度、何分先書申出候通、先我資本ヲ加ヘテ會社ノ組織ヲ改善致候事當務ノ急ニ

而、其方遲緩候而ハ色々事務之進行上不如意之点多ク、苦心罷在候。御承知被下候通、折角是迄成シ遂候而、萬一不名誉ナル結果共相成候節ハ、尋常内地ノ事ト違ヒ關係スル處も不少、若シ御鼎力ニ頼リテ鄙願玉成致候へハ、一方ニハ事業上ノ擴張ヲ行ヒ、一方ニハ更ニ其筋ニ向テ航海奨励法ノ精神ニ基キ或ル年限間一定ノ助成金ヲ請ヒ、以而戰勝ノ餘威、馬関條約ニ因テ得タル一部ノ權利ヲ永久確固ニ掌握スルコトヲ得ヘク奉愚信候。委曲前書ニ尽シタレハ、敢而再三瀆述不仕、微衷萬閣下之御明鑑ヲ仰キ候。頓首不備。 一月初十日夜二時 白岩龍平拜手 野崎賢臺侍史

(封筒表) 大日本備前國邑久郡幸嶋村／大字西幸西／野崎萬三郎殿／親展要書

(封筒裏) 封 清國上海英租界廣東東路／大東新利洋行／白岩龍平／明治三十年一月十一日臨時米國郵船ニ付して／一月十六日着

(本書寫シ)

大東新利洋行郵便物運送約定書

第一条 通信省ハ右清國上海大東新利洋行所屬ノ汽船ヲ以テ郵便物ヲ運送セシムル爲通信省ト洋行トノ間ニ本約定ヲ締結ス

第二条 此約定ニ於テ郵便物ト称スルモノハ郵便條例萬國郵便條約其他將來發布ニ係ル法令ニ依リ郵便(小包郵便物ヲ包含

ス)物トシテ取扱フモノ並ニ郵便事業及事務用物品ノ類ヲ云フ

第三条 洋行ノ従事スヘキ定期航路及其航行度数ハ左ノ如シ

一 上海蘇州線 毎日一回兩港発船

一 上海杭州線 毎週一回以上兩港發船

第四条 第三条ノ航路及度数ニ對スル發着日時ハ可成郵便物發着ノ便利ヲ圖リ上海杭州線ニ在テハ日本郵船株式會社汽船ニ接

續スル様相當ノ日時ヲ撰ヒ每三ヶ月若クハ一定ノ期限ヲ定メ豫メ各線汽船ノ定期發着日時表ヲ調製シ實施前五日迄ニ

發着地ノ郵便局ニ差出シ且ツ同時ニ其一通ヲ通信局ヘ差出スヘシ但不得已事故ニ依リ之ヲ變更スルトキハ其都度發着地ノ郵便局及通信局ヘ届出ツヘシ通信局ニ於テ其發着日時ヲ不適當ト認メ變更ヲ命スルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第五條

大東新利洋行ハ船体又ハ機関ノ破損其他不得已事故ニ由リ第三條ニ定ムル定期航行ヲ履行シ能ハサルトキハ他ニ適當ナル汽船ヲ求メ代航セシムヘシ但上海蘇州線ニ在テハ通信局長ノ認可ヲ受ケ臨時航行度数ヲ隔日一回迄ニ減縮スルヲ得ヘシト雖トモ上海杭州線ニ在テハ如何ナル事情ニ因ルモ休航スルヲ得ス前項ノ場合ニ於テ事ノ急施ヲ要スルトキハ先ツ最寄郵便局長ノ認可ヲ受ケ之ヲ施行シ然ル后通信局長ノ追認ヲ受クヘシ

第六條

第七條

汽船航行中難破等災害ニ罹リタルトキハ最モ郵便物ノ保護ニ注意シ臨機ノ處置ヲ取り關係郵便局ヘ送送方取計フヘシ郵便物ハ盜難濕濡火災其他一切損害ノ虞ナキ様安全ナル場所ヲ撰ヒ且ツ損害ノ豫防上適當ノ設備ヲ施シ之ヲ藏置スヘシ發着地郵便局ニ於テハ隨時其局員ヲ派シ之ヲ監査セシメ保安ノ途ヲ盡サ、ルモノト認ムルトキハ更ニ相當ノ手當ヲ命スルコトアルヘシ

第八條

第九條

大東新利洋行ハ各港ニ於ケル郵便物積卸及汽船ト該地郵便局相互間ノ運送ヲ負擔スヘシ  
本行支店若クハ代理店ハ定期船發航毎ニ遅クモ二十四時間前其發航地ノ郵便局ヘ船名及出發時刻ヲ届出ツヘシ臨時船ヲ出發セシムルトキ亦全シ

第十條

本行支店若クハ代理店ハ運送スヘキ郵便物ヲ受取ル爲メ汽船出發ノ時刻迄ニ積込ミ得ヘキ可成近接スル相當ノ時刻ヲ計リ店員若クハ船員ヲ當該郵便局ヘ差出シ汽船郵便引渡証ニ照シ其相違ナキヲ認メタル後該引渡証ニ記名調印シ且其郵便物数ヲ郵便航送記ニ式ノ如ク記入シ當該官吏ヲシテ之ヲ記名調印セシメ後其郵便物ヲ受取り汽船搭載ノ手續ヲ爲スヘシ但本條ノ手續ハ汽船ニ於テ之ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第十一條

汽船入港スルトキハ先ツ船員若クハ店員ニ於テ郵便物ヲ取卸シ郵便航送記ニ照シテ當該郵便局ヘ引渡シ該航送記ヘ式ノ如ク記名調印ヲ受ケ置クヘシ但上海郵便局ヘノ持込時限ハ汽船入港ノ時限ヨリ三十分以内蘇州郵便局ニ在テハ一

時間以内杭州郵便局ニ在テハ二時間以内トス

第十二条 郵便物ノ受渡ハ郵便局ノ都合ニ由リ當該官吏ヲ汽船ニ派出シ船中ニ於テ之ヲ爲サシムルコトアルヘシ此場合ニ於テハ郵便物受渡ノ証明方ハ總テ第九条及第十条ニ準拠シ取扱フヘシ

第十三条 郵便局ト汽船トノ間ニ郵便物ヲ陸上逋送スルトキハ篤ト注意ヲ加ヘ雨天ノ時ハ其湿濡ヲ防キ得ル様桐油ヲ以テ郵便物ヲ包纏スヘシ

第十四条 郵便物ハ鄭重ニ取扱フヘシ或ハ踏ミ或ハ投ケ其他一切粗暴ノ取扱ヲ爲スヘカラス

第十五条 各汽船ニハ附録様式ニ隨ヒ調製スヘキ郵便航送記各一冊ヲ備フヘシ該帳簿ハ使用ノ後二ケ年間之ヲ保存スヘシ

第十六条 郵便物ヲ搭載スル船舶港口ヲ出入スルトキハ逋信省ノ徽章ヲ附シタル船旗ヲ掲ケヘシ

第十七条 大東新利洋行ハ各航路ノ起点地及終点地ノ發着月日時刻船名ヲ明瞭ニ記載シ毎月運行シタル汽船ノ運行表ヲ作り翌月十五日限り逋信局ヘ宛之ヲ發送スヘシ

第十八条 本約定ノ各條項履行ノ爲メ要スル總テノ費用ハ大東新利洋行ニ於テ之ヲ負担スヘシ

第十九条 天災其他不可抗力ニ依ル場合ノ外本行支店代理店若クハ汽船ニ於テ受取りタル郵便物ヲ紛失毀損シタルトキハ其航送中タルト陸上逋送中タルトヲ問ハス洋行ニ於テ其損害ニ対シ逋信省ノ命スル所ニ從ヒ相當ノ賠償ヲ負担スルノ義務アルモノトス

第二十条 逋信省ハ大東新利洋行ニ於テ本約定ノ條件ニ違背シタル事實アリト認ムルトキハ一回毎ニ金百円以内ノ違約謝金ヲ徵収スヘシ但第三条及第五条ノ義務ヲ履行セサルトキハ二百円以内ノ違約謝金ヲ徵収スルコトアルヘシ

第二十一条 逋信省ハ郵便物逋送料トシテ一個年ニ付金二千四百弗(墨銀)ヲ大東新利洋行ニ支拂フヘシ第三条ニ定ムル度数以外ニ郵便物ヲ運送セシメ又ハ郵便物数ニ多少ノ増減ヲ来シ其他何等ノ事故ヲ生スルモ約定期間ハ之ヲ増減セサルモノトス

第二十二條 前條ノ金額ハ之ヲ十二分シ各月分ヲ翌月十五日限り上海郵便局ニ於テ支拂フヘシ

第二十三條 此約定ハ明治三十年 月 日ヨリ施行シ全年三月三十一日迄其效力ヲ有スルモノトス而シテ約定終結ノ期ヨ

リ三ヶ月以前ニ約定者ノ一方ヨリ解約ノ申出ヲナサザルトキハ次ノ一年度間其效力ヲ有スヘシ以後之ニ準ス但シ明治三十年四月一日ヨリ三十一年三月三十一日ニ終ル一年度間ノ約定ニ限り三十年三月十五日迄ニ解約ノ申出ヲナサザルトキハ依然效力ヲ有スルモノトス本約定期限内ハ何等ノ事故アルモ双方協議ノ上ニアラサレハ本約定ヲ解除又ハ變更セサルモノトス但シ洋行カ此條約ノ條款ニ違背スルコト屢々ニシテ逋信省ニ於テ郵便物遞送上不充分ト認ムルトキハ其事由ヲ指示シ本約定ヲ解除又ハ變更スルノ權ヲ有ス

第二十四條 此約定書ハ二通ヲ調製シ双方記名調印ノ上各一通ヲ受領ス

明治三十年一月 逋信省逋信局長心得 男爵 鈴木大亮

大 東 新 利 洋 行

21【明治三十年一月三十一日付 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛】

敬覆仕候。去本月十三日付御芳墨同二十二日接到、忙手拝讀致候。野生ハ一月十一日付逋信省トノ約定一件二付、一書捧呈仕候處、已ニ御披閱被成下候御事ト奉存候。爾來彼是ト御配慮被成下、猶又夫ニ対スル御高見等御垂示、縷々之御高教逐一拝領、數ニモナキ鄙生之願意ヲ不棄、骨肉ニモ勝ル御盛情、偏ニ感激ニ堪不申候。清曆歲尾迄ニ御確報願出候儀ハ、本年前途ノ方針も有之申出候得共、其儀ニハ相運兼候趣、是又致方無之、当方ハ別ニ目前一日ノ急アルニ非ス。營業ハ依然逐日都合宜敷方ニ有之、御懸念被下間敷候。貴命ニ從ヒ、詳細之依頼書今便分岡山杉山岩三郎氏宛差出申候。就而ハ更ニ杉山氏ト御協議奉煩上候。鄙見ニテハ清人ト合資ニテも將來敢テ差支無之候而已ナラス、實際上利益スル点も不少候得共、此業ニ限リテハ何分純全タル國家的事業ニも候ヘハ、若シ総テ日本人ノ資本ニ由リテ經營致候様相運候ヘハ、猶更好都合ト奉存候。兩様内何レ共

当方ハ差支無之候。外務當局等へ請願補助等ノ運動ハ、御高教之如ク目今ノ俣ニテ其儀申出候共、到底無効タルヘキ次第ハ野生愚見も御同様ニ有之。先ツ第一ニ組織ヲ改良シ、然ル後ノ事ト相成可申順序ニ有之。第一組織ノ方サへ完全ニ相成候ヘハ、或ハ貿易擴張費ノ内分、或ハ航海奨励費ノ内分、又或ハ郵便通信料其他ノ名義ヲ以て年々一定ノ助成ヲ申受候儀ハ敢テ難事ニ有之間敷奉愚存候。郵便通信送料丈ニテも二千四百ノ数ハ餘リ少ク、倍數迄ニハ補給可致トノ議も已ニ当地領事其他ノ間ニ私議有之候次第第二御座候。杉山氏父子、河原氏等ト御相談、其結果ニ依リ小生帰朝可致哉、又ハ御社員一名御出張可相成哉。此儀も拝承仕候。已ニ清曆歳尾も相過キ、杭州ノ方も定期線相開ケ、當方創業も先ツ一段落ニ付、御協議ノ模様ニ由リテハ如貴諭一切事務ヲ河本氏へ相托シ、一度帰朝可仕決心致候。就テハ其御心組ヲ以て御協議被成下、愈御決定相成候ヘハ、直ニ其旨御下報被成下度、御報知ヲ得テ繰合セ早日旅程ニ上リ可申候。本件ニ付テハ一切閣下ノ指揮ヲ受ケテ進退始終可仕、猶微衷之程深ク御諒察奉禱候。書不尽意。頓首拝具。 一月三十一日 上海 白岩龍平 野崎萬三郎殿侍史

(封筒裏) 大日本備前國邑久郡幸嶋村ノ大字西幸西ノ野崎萬三郎殿ノ親展

(封筒裏) 封 清国上海英租界廣東路ノ第十二號ノ大東新利洋行ノ白岩龍平拜寄ノ明治三十年二月九日着

22【明治三十年三月二十一日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

拝啓、陳は過日ハ御繁多之中ハ突然罷出候ニも不拘、種々御懇諭ヲ賜リ奉銘謝候。同日午後第三時帰岡、四時分杉山氏ヲ訪ヒ拝眉ヲ得候處、兼而閣下分御依頼有之候事ニテ十分尽力可致、来二十五日後上坂、大坂商船會社へ熟議決行可為致見込ナリトノ事ニ有之。一応挨拶相述候後、同氏ヲ辞シ河原氏相尋申候處御不在ニテ、夫分花房氏へ參候處風邪且何カ緊用中ニ而不得面會、因テ夫分更ニ河野知事相尋候處、在宅中ニテ緩々談話ヲ得、支那ノ近状等も雜述致置候。昨日ハ早朝分河原氏相尋候處、風邪ノ氣味ニテ平臥致居ラレ、一兩日後ニ面會致シタシトノ事ニテ無已引取申候。本日只今同氏分來書、明夕ヲ期シ來談可致旨被申越候ニ付、明晩ハ緩々卑見ヲ述ヘテ同氏ノ教ヲ乞ヒ候心得ニ御座候。杉山氏ノ談ニ由レハ、大坂商船會社も目下政府保

護金之件ニ付大運動中ニテ、此一週間内ニハ其方決定可致、其上ナラデハ当方事件も持込難クトノ事ニ御座候。尚右會社へ相談ニ付テも、其方法等細密之儀ハ河原氏へ面會ノ上ニアラズ候而ハ判然難致、何レ明夕同氏の意見等承候上ニテ更ニ委細之儀御報道可申上候。

野崎武吉郎氏ハ先月廿一日夕發熱、此頃漸ク快方ニ被向候趣、尚來月中旬迄ハ滯京之様子ニ有之、夫迄ニハ野生も上京之運ニ至リ可申心算ニ御座候。右一寸過日之御礼旁当方模様申上度、書外後郵分可申述候。頓首敬具。三月二十一日後第三時

白岩龍平 野崎老臺閣下

（封筒表） 備前國邑久郡幸嶋村／西幸嶋／野崎萬三郎殿／親展

（封筒裏） 封 岡山市西大寺町／三好野方／白岩龍平／明治三十年三月廿二日着

### 23 【明治三十年三月二十二日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

拝啓仕候。一昨日一書拜呈、当方模様拜述致候處、已ニ御台覽被下候御事ト奉存候。今夕河原氏へ面會談話之末、來ル二十五六兩日之内同伴上坂ノ事ニ相決シ申候。同氏ハ熱心ニ荷担被致、上阪ノ上、自分主トナリ杉山氏其他ノ有力者ト會合、如何ナル方法ヲ以テも成功為致度旨ニ御座候。目下同氏ノ案ニテハ、第一大阪有力者間ニテ資本ノ醜集ヲ試ムルコト、第二其方思ハシキ結果ヲ得サルトキハ資本ノ半額ヲ實業者分、半額ヲ政府勸業銀行等分借入ルコト、第三今度大阪商船會社ニ於テ政府分十五万円十ヶ年ノ補助ヲ受ケ揚子江航路ヲ開クニ付、蘇杭航路も同社事業ノ一部トシ小生等も同社員トシテ揚子江航路ノ方も助勢スルコトノ三方案ニ御座候。此三者、萬一成ラサルモ尚他ノ方法ニ由ルヘクトノ事ニ御座候。同氏之如此キ熱心ナル助力ヲ得候事故、何トカ方法相付可申下被存候。右之都合ニ御座候間、小生も尚兩日間此地ニ滞在ノ後、上阪ノ途ニ就キ候筈ニ御座候。尾関真金氏、昨夜御來訪、色々雑談仕候。右不取敢一寸御報申上度、餘ハ後鴻分可得御意候。頓首。三月二十二日夜十時 龍平拜手 野崎賢臺閣下

(封筒表) 備前國邑久郡幸嶋郡西幸嶋／野崎萬三郎殿／親展

(封筒裏) 封 岡山市西大寺町三好野方／白岩龍平／明治三十年三月廿四日着

24【明治三十年三月二十七日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

拝啓、迂生儀本日着阪、当分左記ノ處ニ止宿仕候。委細ハ後報ニ譲リ御一報迄。艸々頓首。

三月二十七日夜七時 大阪中ノ島六丁目岡田キク方 白岩龍平

(葉書表) 岡山縣備前國邑久郡／幸嶋村字西幸嶋／野崎萬三郎殿

25【明治三十年四月四日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

謹啓、過日ハ御懇書御恵與難有奉拝誦仕候。来阪後御無沙汰ニ打過候段、御海恕被下度候。三十一日河原氏帰阪、其前杉山氏ハ行違ヒ帰岡被致、此地ニテ面会ヲ不得、杉山孝平氏ニも拝眉、彼是協議相尽シ候結果、大阪商船會社トノ相談ハ急ニ纏マリ兼候形勢ニ有之、因テ第二ノ方法ニ出テ株式募集ノ計画相立、河原氏ハ金澤仁兵衛、田中太七郎等當地有力者ヘ相談ヲ請ヒ候事トシ、大略見込も相立候ニ付、小生ハ一先出京、政府當局者ノ意向相確カメ候手筈ニテ、明早朝当地發上京之途ニ相上リ申候。右政府補助ノ途相立候ヘハ、株式募集ノ方ハ成功可致見込ニ有之申候。必竟河原氏病氣療養中ニも不拘熱心引受御周旋御指揮ノ致ス處、即チ閣下御紹介之御盛情ニ依ル事ニ而、不敏之身ニ取り窃ニ感激罷在候。尚出京後ノ模様ハ時々御報道可申上候間、吉報御待受被下度奉祈上候。出發ニ臨ミ略文ヲ以テ一書要旨而已奉得御意候。艸々頓首。 四月初四日夜十時半 大阪ニ於 龍平拜手 野崎老臺閣下

(封筒表) 岡山縣備前國邑久郡／幸嶋村字西幸嶋／野崎萬三郎殿／親展

(封筒裏) 封 大阪中ノ島六丁目／岡田キク方／白岩龍平／明治三十年四月六日着

26 【明治三十年四月六日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

拝啓、小生儀本日着京、左ノ處投宿仕候。委細ハ追而可及御報、不取敢入京御知ラセ迄。艸々頓首。

四月六日 東京芝区南佐久間町二丁目信濃屋本店ニテ 白岩龍平

（葉書表）岡山縣邑久郡ノ幸嶋村字西幸嶋ノ野崎萬三郎様

27 【明治三十年四月十六日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

謹啓、桜花爛漫ノ好時節ニ御座候處、閣下初御一同御揃益御清榮奉恭賀候。却説、着京後、外務・通信兩省ニ向テ請願ノ主旨相陳述、補助金下付ノ儀ニ付当局之意向相確メ候處、外務・通信兩大臣ハ勿論、内閣總理ニ於而も全然同意ヲ表セラレ、民間ニ於而資本ノ募集上、都合も可有之ニ付、政府も應分ノ加勢可致トテ、兩省主務者分彼是其方法等心配致呉、幸過日来出京中之大阪商船会社現社長・副社長等ヲ呼出シ、政府ノ意旨等説明ニ及ヒ、同氏等ハ小生大阪分河原氏添書ヲ帶來居候事ニも有之、兎モ角何レ共御相談ニ應スヘクニ付テハ、委細河原氏共協議ヲ遂度トノ事ニテ、昨日社長・副社長共帰阪、尚小生も其為明日ヲ以テ一應下阪、協商致候筈ニ御座候。右ニ付テハ政府ノ内意ハ飽迄大阪商船会社ニ長江ノ聯関事業トシテ引受ケシメ度儀ニ有之、或ハ蘇杭州航路ヲ同会社ノ事業トシ、小生ハ同社々員トシテ助力致候様ノ相談ニ結局可致候カトモ存居候。何レニセヨ河原氏ノ指揮助言ヲ仰キ候心得ニ御座候間、着阪ノ後相談ノ結果ハ更ニ御報可申上候。

政府ノ方ハ今年ハ議會も已ニ相終候事故、金子支出ノ途無之候得共、今冬議會ニハ必ス願意相達セシムヘキニ付、今日速ニ会社ノ組織改良、事業ノ擴張ニ取掛リ只度トノ希望ニ有之、外務ニ於テハ小村次官、通信ニ於而ハ佐藤管船局長、田通信局長等熱心ニ助力賛成、思ヒシヨリモ好都合ニ有之、大隈、野村ノ兩大臣ニも其紹介ヲ以テ面謁相遂候儀ニ御座候。上海ノ方も小生出立後、百事都合宜敷、商売も次第ニ繁栄ノ形ニテ、河本氏專ラ経営致呉居候。御同喜被成下度候。野崎武吉郎氏も尚滯京中ニテ誠ニ好都合ニ御座候。本日も近衛公御招待ニ而野生も席末ヲ汚シ申候。同氏ハ大抵廿日過御出立之筈ニ御座候。右一寸情

況具陳申上度、餘ハ後郵御待披下度候。頓首敬具。 四月十六日夜二時 東京 龍平 野崎賢臺閣下

(封筒表) 岡山縣備前國邑久郡幸嶋村ノ字幸嶋西ノ野崎萬三郎殿ノ親展

(封筒裏) 封 東京芝南佐久間町二、信のやノ白岩龍平ノ明治三十年四月十九日着

28【明治三十年五月四日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

拝啓、新緑之候ニ相向申候處、愈以御健勝奉南山候。却說其後大阪商船會社トノ交渉意外ニ長引キ、今ニ滯阪罷在候。同社正副社長ハ東京ニ於テ外務・通信兩省當局者ヘ大略引受帰阪致候ニも不拘、重役中ニ多少異議も有之、何分急ニ相纏リ兼、今日ニ及申候。結局同會社ト聯合提携ノ事ハ第二ノ事トシ、目下差当り全社ニ於而小蒸氣船二隻ヲ購入、小生ノ方ヘ貸付候臨時ノ約束丈致候事ト相成、本日彼地ヘ出張之理事杉山孝平氏其用向ヲも相帯候次第ニハ御座候得共、此丈ノ助力ニ付而も其約束條件今少シク談合相付兼、或ハ此方も不調ト相成ルヤモ難計ク候。何レノ道、数日内此地ノ用向ハ一應相終リ、再ヒ出京之覚悟ニ御座候。東京ニハ今度帰京致候上海総領事珍田捨巳氏も目下滯京中ニ有之、政府ノ方ハ猶更都合宜敷、或ハ別ニ合資又ハ株式ヲ以而一會社ヲ組織スルノ方法ニ出ツヘクトモ存居申候。

以上、商船會社ノ交渉ハ勿論、向後運動ノ方針其他一切、河原信可氏之示教ヲ仰キ居候次第ニ而、同氏ハ其以來熱心ニ引受世話致呉ラレ、小生も百事同氏ニ依頼、最早成敗共斯人ニ依テ決可申覚悟ニ有之申候。合資等ノ組織ト致候ニ付テモ、無論同氏ノ首唱贊助ヲ仰キ候仕合ニ御座候。同氏ハ従来多年船舶事業ノ經驗ト云ヒ、通常ノ地方紳商ト違ヒ政府ノ信用も至而厚ク、先達而大隈・野村ノ両大臣ヘ面謁致候際も兩人共同氏ノ事ヲ深ク倚信賞賛、萬事彼人ニ相談可致ト申サレ、又萬不得已ルトキハ一應河原ノ出京ヲ請ヒ、自分等分も相談可致トモ被申候。今度、商船會社トノ交渉相纏リ兼、他ノ方法ニテ資本等相募候事トモナラバ、河原氏ヲ戴キ名誉社長トモ相仰候心得ニテ、河原氏も其儀内諾致呉ラレ、其節ハ同氏ニ一度出京相願候筈ニ有之、河原・杉山両氏ヲ首トシ、東京ニテ一二名望家ヲ請ヒ、組織發表致度計画ニ御座候。同氏も一昨年来、病氣ノ為萬事ヲ謝

絶為致居候ニも不拘、此事ノミハ為國家打捨置カレストテ斯迄ノ御世話、誠ニ感激之至ニ不堪存居申候。何卒御書通ノ序特ニ小生感謝ノ微意ヲも御傳達、尚宜敷御依頼被成下度、偏ニ奉願上候。事業ノ盛衰成敗ハ半運命も有之候事故、夫カ為世間ノ毀譽等ハ固分意ニ介スルニタラス。只其方法ヲ尽シ誠實熱心ニ己ヲ尽ス迄ニ有之。此儀ニ付而も閣下ノ不一方御苦心ニ預リ、又河原氏ノ如キ人ヲ得テ事ヲ謀ルハ真ニ小生ノ幸福ニ御座候。政府補助ノ件も己ニ内定致居候儀ニも有之、此先多少之難関ハ有之候共事業ノ成立ハ疑ナク河原氏も申居候間、何卒御心配被下間敷奉禱上候。

野崎武吉郎氏も在京中、病氣ニ罹ラレ候處、其後全癒、此比ハ餘程快健ノ由ニ有之申候。小生運動ノ模様ハ同氏へも毎々通知致居候得共、尚御面會ノ御折も被為在候はゞ、委細御会谈奉願上候。右一書近状申陳度、尚不日当地出立、東上ノ砌ハ更ニ御詳報可申上候。乍恐縮河原氏へ御寸暇ヲ以テ一書御差出置被下度奉希願候。艸々頓首。五月四日大阪ニ於而 龍平 野

崎老臺閣下

（封筒表） 岡山縣備前國邑久郡幸嶋村ノ大字西幸嶋ノ野崎萬三郎殿ノ至急親展

（封筒裏） 封 大阪中ノ島六丁目ノ岡田キク方ノ白岩龍平ノ明治三十年五月六日着

29 【明治三十年五月七日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

拝啓、過日一書拝呈仕候處、己ニ御賢覽被下候御事ト奉存候。大阪商船會社トノ交渉ハ、結局、今日條約ヲ取結ハス、来年度議會通過後迄小生ニ於而現在ノ營業ヲ持續シ、其内別ニ資本ヲ得タルトキハ合資、又ハ株式等ノ組織ヲ以テ營業繼續可仕、若シ其組織成立セサルトキハ大阪商船會社ト協同提携之出来得ヘキ筈ニ而、略其内議相調、双方ノ政府ヘ其旨復命ニ及候筈、小生ハ又今年度政府ニ向テ多少ノ補助金ヲ請求シ、一面東京横浜ノ間ニ心當リノ者ヘ資本ノ相談相試候仕合ニ御座候。右ノ儀、河原氏賛成ニ而本日決定、直ニ出京之運ニ致候次第ニ御座候。着京後ハ更ニ御報可申上、一寸右而已御一報申上度、東京ハ大抵一ヶ月間位ニテ政府民間ノ協議成否共決定、一先上海ニ引上候心算ニ御座候。右以走筆要領而已、艸々頓首。五月七日

龍平 野崎賢臺侍史

(封筒表) 岡山縣備前國邑久郡幸嶋村西幸嶋／野崎萬三郎殿／親展

(封筒裏) 封 大阪ニ於／白岩龍平／明治三十年五月七日同九日着

30【明治三十年五月十五日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

謹啓仕候。前略御仁免被下度候。大阪迄大略同地模様申上候次第二而、商船會社トノ交渉ハ好結果ヲ得ル迄ニ至リ兼出京仕候處、外務ニ於テハ彼本件ト尤密接ノ關係アル上海總領事珍田氏、民間ニテハ昆布會社長村山長太郎氏等熱心ナル助力ニ而、通信省ニ於テハ当方ノ要求ニ同意致シ来年度迄一ケ年三万円十年繼續ノ補助費ヲ豫算ニ組込候事ニ相決シ、又右資本金募集ノ方ハ議會召集迄ニ村山氏引受、河原氏ト打合セノ上組織可致約束ニテ、小生ハ目下其筋へ請願中ノ郵便航送料増額ノ件相決シ次第、直ニ上海へ引取候事ト致シ、即チ来ル本月二十四日迄ニハ当地出發、帰申之途ニ上リ候心得ニ御座候。右之都合ニ而目下請願中ノ航送料増額之件可決致シ、本年度も維持ノ見込相立、引續キ組織も新夕ニ成リ、議會も通過致候節ハ、斯業ノ前途も安固確實ナルヲ得ヘク、未タ安心ハ不相成候得共、右之運ニ立至リ候段ハ御同喜被成下度奉願上候。必竟今日ノ都合ニ立至候も、其元閣下之配慮多ニ居ルコトハ今更申迄も無之、珍田氏ノ公平ナル熱心、村山氏ノ義侠ナル助力ハ更ニ出京後感奮相加申候。目下、朝野關係ノ有志有力者ヲ訪ヒ、其同意援助ヲも相求メ居申候。大略ノ成行如右ニ有之、急キ御一報申上度、尚萬端確定、小生帰申ノ日期等も相定候上ハ、更ニ御詳報可申上候。尚時節柄御自重專一二奉禱上候。艸々敬手。五月十五日  
龍平 野崎老臺閣下台覽

(封筒表) 岡山縣備前國邑久郡幸嶋村／西幸嶋／野崎萬三郎殿／親展

(封筒裏) 封 東京芝南佐久間町信のや／白岩龍平／五月十五日發／明治三十年五月十八日着同十九日披封

31【明治三十年六月六日付 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛】

謹啓仕候。日増ニ暑氣相加申候處、愈以御清泰奉恭賀候。陳は過日ハ參上、種々御高配ニ預リ御垂教ヲ賜リ奉感謝候。其翌日味野へ參リ一泊、翌朝、長尾田辺氏ヲ一訪ノ後、尾道ニ出、九州ニ渡リ福岡ニ愚兄相尋、熊本ニ友人相尋所用相弁、一昨夜当地着仕候。上海へハ本日出帆ノ郵船有之候ニ付、可相成ハ是ニ便乗帰申仕度心組ニ而、着後匆匆電報ヲ以而東京模様相尋申候處、昨日村山氏々、大隈伯不快ハナシデキヌチトノビル、トノ返電ニ相接申候。然ル處、上海ノ方ハ兼而申出居候様之成行ニテ、何ノ齎ラス所も無之候テハ何分帰申相成難ク、因テ無已一便延期（一週間）当地ニ滞在、東京確報相待候上ニテ出發仕候事ト致申候。右之次第ニ而、此趣杉山・河原氏へハ同時御一報申上置候。時宜ニ由リテハ東京ノ方相運兼候節ハ、萬不得已、杉山氏等ノ大力ヲ借リテ此難関切抜候事トモ致サ、ルヘカラサルカトモ苦慮罷在申候。野崎武吉郎氏へ東京事情等一切陳述仕候處、御大悦被致、議會ノ御ハ自分再撰ト否トニ不拘、十分尽力可致旨被申候。又田辺為三郎氏ニも萬一何レノ方案もハヅレ候節ハ、目下ノ救急ノ為ニハ武吉郎氏ヲ説テ加勢も可為致様取斗ヒ度考ナリト被申候。御含込ニ申上候。杉山氏ハ多分此比ハ御出京ト奉存候得共、若シ急ニ御出會ノ事も被為在候へハ、猶宜敷御依頼置被下度奉懇願候。右着崎御報旁申上度、艸々不尽。六月初六日午後三時 龍平拝 野崎賢臺閣下

御宅御訪問ノ翌朝、花房御老人へ面謁、色々ト御懇切ナル教訓ヲ領シ申候。

（封筒表） 岡山縣備前國邑久郡幸嶋村ノ字西幸嶋ノ野崎萬三郎殿ノ台展

（封筒裏） 封 長崎市今町緑屋ノ白岩龍平拜上ノ明治三十年六月十日着

32【明治三十年六月二十日付 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛】

謹啓仕候。爾來御無音ニ打過申候。其後当地ニ於而東京確音相待居候處、前便込ニ相決兼候為、更ニ一便船延期仕候處、過日來又々大隈伯病氣ノ為談合相決セス、最早待兼、小生ハ一先ツ上海へ引取申候事ト致シ、本日ノ郵船ニ而帰申仕候。東京ノ方

愈不成トアレハ杉山氏ニも依頼致居候事ニも有之、其方相運フヘク候得共、大隈伯熱心ニ周旋致呉ラレ、大抵成就ノ見込東京  
分も申越候ニ付、兎ニ角上海ヘ罷越、東京ノ成否相待候事ニ決心仕候次第ニ御座候。東京相談ノ成行ハ時々詳細ニ河原氏迄御  
報知、杉山氏ヘも大略ハ相通居申候儀ニ付、左様御承知被成下度候。長崎ニテ二週日ノ風待チハ随分心苦敷、是今上海ニ向ヒ  
更ニ難局ニ飛入申候。天尚ホ我心思ヲ鍊ラントスルモノニ似タリ。御一笑被下度候。萬一東京ノ方何ノ功もナキトキハ萬不得  
已ル場合ニハ杉山氏ニ一奮發相願候愚存ニ御座候。何レ委細ノ儀ハ更ニ上海分可申述、右成行御聽置被下度、要旨而已御報申  
上度候。右出發ニ臨ミ勿々不及餘事、御仁恕奉禱上候。頓首敬具。 六月廿日 龍平拜 野崎萬三郎様御侍史  
追而味野々崎氏ニハ過般ノ互撰会ニ於而満点御再選相成候趣、御同悦之至ニ奉存上候。

(封筒裏) 岡山縣備前國邑久郡ノ幸嶋村大字西幸嶋ノ野崎萬三郎殿ノ台展

(封筒裏) 封 長崎市今町緑屋分ノ白岩龍平拜ノ明治三十年六月廿四日着

### 33 【明治三十年七月六日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

拜啓、爾来不相變御健勝被遊御起居候段、奉慶賀候。降而迂生儀、二十日長崎發、二十二日無事着申、其後直ニ蘇州ヘ出張、  
漸ク一兩日前帰滬仕候仕合、其為到着之御報も不仕、延引致候段、平ニ御仁恕被成下度候。長崎分御一報申上候如ク、東京ニ  
於而目下救急ノ一策ハ大隈伯病氣ニ引續キ、肝緊之珍田公使ハ十八日伯拉西ヘ赴任、村山氏ハ二十二日上海ヘ向出發之為、彼  
是ト齟齬相生候為、遂ニ成否共決定ノ運ニ不至、乍遺憾其俣ニ而一先上海ヘ参リ候次第ニ御座候。

然ル處、留守中、河本磯平氏小生ニ代リテ困難ノ間ヲ苦心經營、其為營業も次第ニ整頓進歩ヲ告ケ居候始末、只目前經濟上ノ  
困難ハ兢争其他ノ為依然タル有様ニ候得共、是又従来ノ組合者其他ト申合セ、何トカ保續ノ道相立度苦心罷在候。  
過日、村山氏来申ノ砌、神戸ニ於而河原氏ト會合、前途政府及國會ニ対スル組織ノ儀ニ付相談被致呉候趣、大要ハ兼而申出居  
候如ク右両氏主トナリ、他ニ一二ノ有力者ヲ語合セ、世間ニ發表之筈ニ御座候。但是ハ議會開設前、必要ノ起リタル場合ニ組

立候都合ニ御座候。

本年ハ繭生糸等視察之為、当地へ来渡、蘇杭州巡遊致候者も不少、蘇杭ノ實勢、航路ノ必要等も追々内地官民有志ノ識認スル所ト可相成奉存候。蘇州ハ目下地所檢分中、杭州ハ已ニ地券ヲ交附致候。如何ニシテ此新開地ヲ經營スヘキカハ目下ノ一問題ニ御座候。是等ニ対スル愚見并ニ当地方情况等ハ追而御報道可申上心得ニ有之、不取敢来着御一報相兼、右要旨陳上仕度、如此御座候也。艸々頓首。七月初六日 白岩龍平 野崎賢臺閣下

（封筒表）岡山縣備前國邑久郡幸嶋村ノ大字西幸嶋ノ野崎萬三郎殿ノ台展

（封筒裏）封 清国上海ノ大東新利洋行ノ白岩龍平ノ明治三十年七月十二日着

34【明治三十年九月十三日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

拝啓、小生儀去十日神戸直航ノ天津丸ニ搭シ本日午後第二時無事着神仕候。明朝、河原氏ニ大阪ニ拝會、萬端方向相定候筈ニ御座候。何レ委曲ハ跡分申上候。不取敢右ノミ御報申上度、艸々敬具。九月十三日 神戸ステーションニテ 白岩龍平

（葉書表）岡山縣ノ備前國邑久郡幸嶋村ノ野崎萬三郎様

35【明治三十年九月十八日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

拝啓、時下秋冷之砌ニ相成申候處、先以閣下始御一同御打揃御清榮、慶祝此事ニ奉存上候。陳は神戸分一寸御報申上候如ク、翌日大阪ニ罷越、河原氏ニ拝會、委曲之事情明白仕候ニ付、河原氏意見ニ随ヒ一先直ニ東上、一昨夜無事着京仕候段、此段乍他事御放慮被成下度候。用向ハ組織發表ニ付、小生ノ帰朝ヲ要セラレ候儀ニ而、客月末来、杉山岩三郎氏御上京中、彼ノ村山、岸田氏等ト會合商議ノ結果、兎ニ角小生ノ帰朝ヲ俟テ決議可致トノ事ニ相成、電報ヲ以テ照會被致候儀ニ御座候。他政府豫算等ニハ今日迄ノ處、別ニ異条無之、只一種競争の意味ニテ同業者ノ企画有之候得共、之も成立ハ無覚東方ニ被察申候。右

ノ次第二御座候間、目前差迫候組織方案ニ付、東京ノ方相談相纏メ候上、小生ハ再度阪岡ノ間ニ罷下リ、河原・杉山両氏ノ協商ヲ経而發表ノ運ニ致度愚案ニ有之申候。何分、東京始内地一般經濟不如意ノ際、殊ニ支那貿易ノ如キハ彼金貨制度ノ影響等ニ由リ目下莫大ノ資本ヲ募集スルコトハ不容易ル事業ニ有之、殊ニ議會通過ノ以前ニアリテハ株主加名も強ヒ難キ形勢、此辺如何卜痛心罷在申候。併シ杉山氏ハ固分河原氏ト云、村山、岸田氏ト云、何レモ經驗アル事業家ニ候ヘハ、此等諸氏ノ賛同ヲ得テ此一小事業ノ成立セサル事も有之間敷、奮勵罷在候。大阪分直ニ出京致候為、杉山氏トハ行違ヒ不得拜眉候間、其内御面會ニも可相成、何分ニも宜敷御委嘱御厚礼御述置被下度奉懇望候。右到着匆匆、不取敢以乱筆要領而已御一報申上度、書外後鴻分被陳可仕候。敬具。 白岩龍平 九月十八日 野崎老臺閣下

尚々上海ノ方ハ、先達而皮膚病ノ為、一時九州ニテ入浴中ノ河本磯平氏平癒、帰甲致候ニ付、小生留守中、萬事無差支儀ニ有之、左様御安心被下度候也。

(封筒裏) 岡山縣備前國邑久郡幸嶋村ノ字西幸嶋在ノ野崎萬三郎殿ノ親展平安

(封筒裏) 封 東京芝区南佐久間町二ノ信濃屋本店ノ白岩龍平

### 36 【明治三十年十月六日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

謹呈、過日ハ御出岡中、久々ニ而拝芝ヲ得、近比之樂事ニ奉存候。御高旨ニ從ヒ其翌早、味野へ罷越候處、丁度、田辺氏も讚岐地方分來會、緩談仕候。事業上ニ付、團體組織ノ件等、巨細陳上仕候處、武吉郎氏ニも殊ノ外同情同喜ヲ被表、小生分ハ一言不申出候得共、先方分斯迄ニ政府民間ノ人々力ヲ添エラル、ニ、關係ノ尤親密ナル野崎ニテ等閑ニ附シ難クニ付、若シ所望トアラハ野崎家ニ於而も一臂ノ力ヲ添ユヘク、尤武吉郎氏出名ハ代理者ヲ立テ自身間接ニ力ヲ致スヘク、且又其出資額ハ他出資者ニ不拘現金ヲ以而支出助力可致ニ付、必要トアラハ岡山ニ於而河・杉岡翁會議ノ席ニも田辺出席可致、小生ノ希望ニ任スヘキ旨ニ有之、小生も感悦不斜引取申候儀ニ御座候。右ノ次第二而、同家分一臂ノ力ヲ貸サレ候儀共相成ラハ、前途多少之好

都合ト奉愚存候次第、御同慶被成下度候。河原翁も不在中ニ而未タ御来岡無之、何レ同氏来岡ノ上ニ而前条ニ付而も重而台駕ヲ勞シ奉リ可申奉愚存候。右概要御報知申上度、書外後郵分拝述可仕候。御繁忙中、向後共御答書ニ及不申候間、左様御了承被下度奉願候也。頓首不悉。十月六日早朝 龍平 野崎老丈台鑑

農工ノ方ハ全ク中止ノ由ニ承及候。取急乱筆御仁恕被下度候。

（封筒表）備前國邑久郡幸嶋村西幸嶋／野崎萬三郎様／親展

（封筒裏）× 岡山市三好野本店／白岩龍平／明治三十年十月七日着

37 【明治三十年十月十日付 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛】

拝啓、前略御仁免被下度候。陳は河原氏ニハ無已用事ノ為出岡出来兼候旨ニ有之、右ハ過日来同氏旅行不在中ノ處、御帰宅後、当地ト電報ノ行違等ニ而、昨朝ニ至リ電報書面等も到着、委細明白仕候。就而ハ杉山氏多忙中ヲ不厭、繰合セ上阪被下候事ト相成、明夕出立ノ時日等定メラレ候約束ニ御座候。両翁会合ノ上ハ評議も一決ヲ見ルニ至ルヘク仕合ノ儀ニ奉存上候。閣下ニも近日ノ内御出岡可相成、来ル十七日ノ味野翁園遊ノ催シニハ御光臨御会話も有之可申、翁初田辺氏へも時機も有之候へハ何卒此上ノ御尽力ヲ祈ル旨、御一礼且御依頼置被下度奉願上候。本日ハ味野翁ノ紹介ヲ得居申候ニ付、高崎知事へも拝趨、得面謁度心得ニ御座候。右近状御一報申上度、御聴置被下度、此後共不及御答書候。頓首不乙。十月十日 龍平 野崎老臺侍史

（封筒表）縣下邑久郡幸嶋村字西幸嶋／野崎萬三郎殿／親展

（封筒裏）封 岡山市西大寺町／三好野本店／白岩龍平／明治三十年十月十一日着

38 【明治三十年十月十七日付 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛】

拝啓、岡山ニ於而ハ都合能拜會ヲ得、奉萬謝候。陳は小生儀去十三日岡山發上阪、杉山氏ハ十四日特ニ上阪被致呉、十五日河原氏ト會合ノ結果、杉山氏ハ多用ニ付其翌歸岡。小生等ハ当地ニ於而政府へ再陳書艸案、事業目論見書、組合内規等調製ニ相掛リ、調濟次第、河原氏同道、重テ參岡、閣下ニも御列席相願、味野野崎氏御代理ニも出席相請ヒ、一同會商相願、確定ノ手筈ニ致候事ニ内定仕候。大抵一兩日中、右調査結了ノ上ハ、直ニ岡山へ罷越候心得ニ有之申候間、其砌ハ御多端中恐入候得共、宜敷御願申上候。本日ハ野崎氏園遊會も天氣好晴ニ而誠ニ好都合、盛況奉想察候。当地築港式ニ而賑合候得共、大喪中ノ御注意も有之候為カ、市中ハ割合ニ寂寥ニ御座候。花火ハ朝來絶間無之、中々ノ景氣ニ有之申候。右成行御一報申上、併而御依頼ノ為、寸楮如此御座候。勿々頓首。 十月十七日 龍平 野崎老臺侍史

(封筒表) 備前國邑久郡幸嶋村字西幸嶋／野崎萬三郎殿／台展

(封筒裏) × 大阪、中ノ島六、岡田方／白岩龍平／明治三十年十月十九日着

### 39 【明治三十年十月二十二日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

拝啓、早速御返電ヲ賜リ、台駕ヲ勞セラルヘク御下命ノ處、田辺氏出席差支有之、杉山翁ニも可成二十五日後ノ方都合宜敷トノ事ノ急ニ大阪へ發電、會合ヲ二十六日ト相定メ、二十五日中ニ來岡相願候事ニ河原氏へ照會、同時ニ再電ヲ以テ申上候次第ニ御座候。誠ニ彼は勝手ケ間敷儀ノミ申出、厚顔之至ニ御座候得共、前条之状況ニ有之、二十六日會合ノ事ニ御心組、同日御尊駕ヲ賜ハラレ度切願之至ニ御座候。尚河原氏御着ノ上ハ御急報申上候事ニ可仕候間、左様御含置被下度奉願上候。二十六日ハ一同御差支無之筈、多分一日又ハ二日間ニ而諸事決定ノ場合ニ立至リ可申愚存ニ御座候。右御託旁奉得御意候。餘ハ拝芝ニ可陳尽候。頓首不備。 十月二十二日午後四時 龍平 野崎老臺侍史

(封筒表) 邑久郡幸嶋村字西幸嶋／野崎萬三郎殿／台展

(封筒裏) × 西大寺町三好野本店／白岩龍平／明治三十年十月廿三日着

40【河原信可書簡 白岩龍平宛、および明治三十年十月二十三日付 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛】

謹呈、陳は貴兄過日御出立之際ノ御端書、尚昨今兩度ノ御電報共夫々拝見、色々御手数ノ段奉謝候。御示ニ従ヒ、廿五日夕刻迄二貴地へ参着ノ積ヲ以而当地出發可致候。御會合ノ儀ハ二十六日午後ト成置被下度、小生も月末ニ際シ外出ハ甚々困却ノ次第ニハ御座候得共、過日不参ニ就テハ杉山氏ノ態々来阪ヲ煩シ候事故、今回ノ儀ハ自家ノ如何ニ関セス是非共出席可仕候条、当日ハ杉山氏ハ不及申、両野崎氏ノ本人代理ニ関セス、必ス御出席ノ事ニ相願度、廿六日ノ會合相終り次第遅クモ廿七日ニハ出立帰阪ノ心算ニ御座候間、何共勝手ケ間敷候得共、万事御差支無之様相願候。旅宿ノ儀ハステーシヨン脇三芳野花壇ニ相定度候間、甚恐入候得共、是又宜敷御取極置被下候様奉願上候。右勝手ノミ如此御座候。以上。勿々不一。 河原信 白岩龍平様

拝呈仕候。昨日ハ又御丁寧ニ御返電ヲ賜リ奉謝候。陳は唯今河原氏ノ別紙ノ如ク書面到来仕候ニ付、二十六日午後今御會同願上候事ニ仕度、何卒御繰合セ當日午後迄ニ御出岡御勞駕之程伏而御願申上候。右時日ニ再ヒ変更無之候上ハ、最早別ニ書面拝呈不仕候ニ付、乍恐縮左様御思召置被下度候。右御都合も可被為在候ニ付、急キ御報知申上度、艸々不備。 十月二十三日

龍平 野崎老臺玉几下

（封筒表） 備前邑久郡幸嶋村字西幸嶋／野崎萬三郎殿／台展

（封筒裏） × 西大寺町三好野本店ニ而／白岩龍平／明治三十年十月廿四日着

41【明治三十年十月二十四日付 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛】

拝啓、御書面被投、奉拝誦候。然ルニ二十六日會合ノ儀、同日ハ井上鉄道長官来岡ニ而、急ニ杉山氏差支ト相成、其旨大阪へ照会ノ末、無已再應延期、来ル二十九日御會合願上候事ニ相改申候。委細ノ儀ハ農工委員会ノ為何レ御出岡相成候へハ、其砌

重而可奉拜話、要領ノミ、更ニ奉得御意候也。勿々頓首。二十四日夕五時 龍平 野崎萬三郎様玉案下

(封筒表) 邑久郡幸嶋村／野崎萬三郎殿／台展

(封筒裏) 封 岡山三好野本店／白岩龍平／明治三十年十月廿五日着

42【明治三十年十月二十六日付 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛】

拝呈仕候。昨夜ハ深更迄御台話拜聴、近比快心ノ事ニ奉存候。今朝、魚嘉へ拜尋候處、同家へハ未夕何ノ通知も無之趣、多分出岡無之儀卜カ奉愚存候。追而後刻田辺氏来着、拜眉之上聞及候儀も有之候へハ、重而可及拜述候。勿々頓首。十月二十六日 龍平 野崎老臺侍史

(封筒表) 上ノ町袋屋ニ而／野崎萬三郎殿／台展

(封筒裏) × 白岩龍平／明治三十年十月廿六日岡山ニ而

43【明治三十年十月二十九日付 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛】

本日午後正四時夕杉山氏裏別荘ニ於而御会合願上候事ニ仕候間、何卒同時刻同所へ御枉車被成下度奉願上候也。二十九日正午 白岩龍平 野崎老臺左右

追而、河原氏ハ過刻来着被致申候。

(封筒表) 上ノ町袋屋方／野崎萬三郎様／要用御願書

(封筒裏) × 花壇ニ而／白岩龍平／明治三十年十月廿九日岡山ニ而

44【明治三十年十一月二十三日付 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛】

謹啓仕候。愈以御清適奉慶賀候。陳は組織一条ニ付テハ、過日大阪河原氏今再應下阪ヲ促サレ、過日ノ岡山會議艸案ニ多少ノ脩正等相加ヘ粗完成、目下通信省ト事業計画上ノ内打合セ中ニ有之申候。多分不遠決定、該組織も發表ヲナス場合ニ立至可申奉存候。議會ハ御承知通りノ形勢ニ而、九分解散ノ方ニ候得共、先ツ当方ハ夫ニ拘ハラズ準備奔走ノ筈ニ御座候。目下杉山氏も在京中ニテ同宿、萬事好都合ニ御座候。中島庄太郎氏今來信有之、一兩日中御返書可致心得ニ御座候。右一寸近況御報申上度、尚時下折角御珍重專一二奉存上候。敬具。十一月二十三日 龍平 野崎老臺席皮下

（封筒裏） 岡山縣邑久郡幸嶋村ノ野崎萬三郎殿ノ親展

（封筒裏） × 東京芝区南佐久間町六ノ信濃屋本店ノ白岩龍平ノ明治三十年十一月廿五日着

#### 45 【明治三十年十二月一日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

拝啓、愈御清光奉恭賀候。陳は過般色々ト御配慮相成居候野崎武吉郎氏推選ノ儀も同氏固辞ノ結果、無已閣下御就任ノ事ト相成、役員撰挙重役互撰ノ結果、頭取ニ御榮任、為一縣幸慶此事ニ奉存候。兼而縷々御申聞も有之候御心組ニ而、百方固辞被致候儀トハ奉存候得共、為一縣私ヲ棄テ、義ニ就カレ候事、千萬御同情ノ至ニ奉存候。副頭取木山氏ハ未タ拝眉ヲ得候事無之候得共、多分御補佐ニ適任ノ御人ト奉存候。行運も其人ヲ得テ初而振興ノ象ヲ呈スヘク、縣下農工ノ為慶祝之至ニ奉存候。右ハ本日味野大人今ノ書信ニ而承知仕候次第ニ御座候。杉山氏も過般來上京、野村大臣へも面會等加勢ヲ與ヘラレ、萬事好都合ニ有之、組織一条も明日杉山翁出立、河原氏ニ大阪ニ而面會ノ上、百事確定ノ手續ニ御座候。只前途氣遣ヒナルハ政界ノ現状ニ而、朝不測タル有様ニ而、目下ノ處内閣ノ瓦解カ議會ノ解散カ二者其一ニ居ルヘク、解散ト相成候節ハ我業ニ取リテハ迷惑不勘、其ノミ懸念ニ御座候。乍去之ハ独力ノ能ク致ス所ニアラサレハ、成行ニ任セ門下夫々運動ニ手ヲ尽シ居申候。近日味野翁も上京ノ筈、大ニ勢援ヲ行可申、待受居申候。此度清国今連レ參リ居候清国友人子供一名、今度杉山氏へ預ケ川上市郎氏ノ手下ニテ岡山中学へ入学セシメ候事トシ、杉山氏連レ歸ラレ候事ニ御座候。右一寸御就任ノ報ヲ聞キ、一書為地方御祝詞申上

度、書外後鴻ふ可得貴意候也。頓首不悉。 十二月一日夜 龍平 野崎老臺侍史

(封筒表) 岡山市上ノ町袋屋方ノ野崎萬三郎殿ノ親展

(封筒裏) × 東京芝区南佐久間町ノ二 信濃屋ノ白岩龍平ノ明治三十年十二月三日岡山ニ而

46 【明治三十一年一月二十五日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

拜啓、愈以御清適御繁務之段、奉恭賀候。陳は迂生儀、客臘尾東京出發。郷里ニ於而十餘年振ノ新正相迎へ、三日間滞在ノ後勝山、加茂ノ兩地ニ殉難者ノ遺族相吊ヒ、夫々津山川ヲ下リ閑谷ニ罷出、西薇山翁ニ拜會、其白雲山館ニ一泊、夫々大阪ヲ經而數日前東京ニ入り申候。兼而御配慮御助力奉仰候上海航業一条も、議會ノ解散ニ逢ヒ一蹉跌ニ御座候得共、是ハ無已事柄、因テ更ニ次期ノ臨時議會ニ臨急ノ追加豫算トシテ提出ノ事ニ當局者ト打合ノ為、此度再應出京仕候仕合ニ御座候。内閣も一切新組織ニ付、多少運動ヲ再ヒスルノ感アリテ手鈍ク候得共、是逆致方も無之、夫々手續相尽シ奔走中ニ有之、多分次期議會ニ於而成效可仕見込ニ有之申候間、御心配被下間敷候。縣下地方も追々總撰挙日ニ差迫リ、多少ノ騷擾ヲ見ル儀ト奉存候。農工銀行も御手腕ニ因リテ着々歩ヲ相進メ候儀ト奉存候。申上候迄も無之、為縣下一般、好模ヲ其初二垂レサセラレンコト、迂生等迄踴望之至ニ御座候。右一寸近状拜述仕度、寸楮如此御座候也。頓首敬白。 一月二十五日夜 龍平 野崎老臺侍史

(封筒表) 岡山縣岡山市上ノ町袋屋内ノ野崎萬三郎殿ノ親展

(下 札) 農工銀行内聞

(下 札) 表書之御方様ハ拙宅ニ御滞在無御座候間、返上仕候也。一月廿七日 橋本八郎兵衛

(封筒裏) × 東京芝南佐久間町ノ信濃屋 白岩龍平ノ明治三十一年一月廿七日岡山着

47 【明治三十一年四月三日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

謹呈仕候。愈以御壯勇、公私御執掌、為邦家奉慶祝候。陳は先日一寸以電報申上候通り、我航業補助案も去月十八日ノ閣議ニテ臨時議會へ提出ノ事ニ決定相成候次第、先以而御同祝被成下度候。夫ニ付、議會通過後、事業着手ノ相談旁数日前一寸來阪仕候。会社發表等ニ付、河原氏ノ意見ニ由リ今一回御地ニ於而小集致シ度トノ事ニ而、來ル七日八日ノ内、河原氏も出岡ニ付、御小集奉願候次第二御座候。小生ハ何レ其前參岡、拝芝ヲ得テ委曲拝陳可仕候。今度ハ只儀式的ニテ一夕数刻ノ談ニ尽クヘキ儀ニ有之申候。御含置御出席ノ勞奉仰上候。中島庄太郎氏も既ニ着申相成候趣來報有之申候。百聞不如一見ノ譬ノ如ク得ラル、所ハ決シ而少小ナラサルヘク、小生适相樂罷在候。右以走筆申上度、勿々如此御座候。頓首敬具。 四月初三 天長令節 龍平 野崎大人侍史

（封筒裏）岡山市紙屋町袋屋ノ農工銀行頭取ノ野崎萬三郎殿 親展ノ追而御帰宅中ナレハ御宅へ御廻送ヲ乞ヒ候  
（下 札）上ノ町ニ同姓有之

（封筒裏）封 大阪中ノ島六丁目岡田方ノ白岩龍平ノ明治三十一年四月三日岡山ニ而

48 【明治三十一年四月六日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

御高論ノ趣、委細拝承、御示之時刻ニ參上仕候。頓首奉覆。 即日 龍平 野崎大人侍史

（封筒裏）野崎萬三郎様ノ拜福

（封筒裏）メ 參加ノ白岩龍平ノ明治三十一年四月六日岡山ニ而

49 【明治三十一年四月十二日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

本日ハ態々御來光ヲ煩シ奉恐謝候。午后五時、杉山裏別邸ニ各夕食ヲ終リ、參集相願候事ニ取極メ御待受申上候間、何卒同時刻御光臨奉願上候。右後刻拜眉ヲ得テ申上クヘクト奉存候得共、用事ノ都合ニ而欠礼可仕哉も難計、不取敢御報申上置候。頓

首。 十二日正午 花壇河原氏席ニテ 龍平 野崎老臺梧右

(封筒表) 上ノ町銀杏屋ノ野崎萬三郎様ノ御直披

(封筒裏) ✕ノ白岩龍平ノ明治三十一年四月十二日岡山ニ而

50【明治三十一年四月十三日付 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛】

拜啓、昨夜決議ノ要領、別紙ノ如ク相認申候間、是ニ御見認ニテも宜敷、御調印、此者へ御付戻奉願上候也。 即日 龍平

野崎老臺侍史

(封筒表) 上ノ町銀杏屋ニ而ノ野崎万三郎様

(封筒裏) ✕ノ白岩龍平ノ明治三十一年四月十三日岡山ニ而

51【明治三十一年五月四日付 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛】

拜啓、陳者過般出岡之砌ハ依例御厚志ヲ蒙リ奉謝上候。其砌ハ遠路態々御来臨ヲ辱フスル等、誠ニ感謝之極ニ奉存候。去月三十日岡山會議ノ決議ニ基キ、兼而組織ノ大東汽船合資會社も愈登記手續ヲ終リ候旨河原氏ノ来電有之申候間、左様御同喜被成下度候。議會も間近ト相成、政界ノ變動トシ難ク候得共、先以而今期ハ解散ニモ至ル間敷噂ニ有之申候。中島庄太郎氏ハ未夕御帰縣無之候哉。右一書御報申上度、追而登記済之上ハ各自調印ノ内約書等ハ右通知ニ添エテ大阪本店事務所ヨリ御郵送可相成筈ニ相成居申候ニ付、左様御承知置被下度候。書外後郵分奉得貴意候。乱筆御容赦被下度候。勿々頓首。 五月初四日 龍平 野崎大人侍史

(封筒表) 岡山縣邑久郡幸嶋村西幸嶋ノ野崎萬三郎殿ノ親展

(封筒裏) ✕ 東京芝区南佐久間町ノ信濃屋ノ白岩龍平ノ明治三十年五月六日着

52【明治三十一年六月三十日付 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛】

拝呈、愈御清適奉恭賀候。過日ハ突然以電報御申上候處、御不在ノ趣御報知被下、難有奉存候。今回ハ政府下付ノ命令書艸案ニ付テ其要領ヲ陳述、并ニ事業着手ニ付テ要スル資本ノ融通方等ニ付、河原翁病氣ニ付、小生岡山へ罷越候次第ニ御座候。然ルニ御不在ノ事ニも有之、杉山・田辺両氏へ相談ノ上相決シ、書類ハ閣下へ御廻覧相願候事ト致シ、至急帰京仕候間、左様御承知被成下度、尚委細ノ儀ハ御出岡ノ砌、杉山翁へ御聞取被下候へハ幸福ノ至ニ奉存候。先以是ニ而本業も五ヶ年間ノ基礎確立致候筈、長々ノ御配慮も空シカラサル儀、偏ニ閣下初メ老諸先輩ノ配意ト亡師友泉下ノ冥護トニ御座候。右出岡ノ用事略陳仕度、乱筆御仁恕賜リ度奉願上候也。頓首敬具。六月三十日大阪ニ於而 龍平 野崎老臺閣下白電

追而事業着手ニ要スル一万五千餘ノ資本ハ、野崎家并ニ杉山・河原翁ニ於而工面ノ事ニ略引受ケラレ、創業費ノミ更ニ各社員一名五十円宛支出ノ事ニ相成候間、御含置被下度候。

（封筒表） 備前國邑久郡幸嶋村字西幸嶋／野崎萬三郎殿／親展

（封筒裏） 大阪客次／白岩龍平／明治三十年七月一日着

53【明治三十一年七月二十七日付 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛】

酷暑之砌ニ御座候處、先以而御健勝奉遥賀候。陳は野生儀過般御地ニ拝趨ノ後、京阪東京ノ間ニ往復、本月十二日東京出發、陸路長崎ニ出、二十二日海上無事、殆ント一年振ニテ当地ニ安着仕候。此段乍他事御降慮被成下度候。然ル二十一日付東京へ宛御惠投被成下候御書面出立後ニ到着、大阪、長崎ヲ追フテ当地ニ而拝披仕候様ノ始末、御返書遅延ノ罪御仁恕被為垂度候。今回芳墨ヲ以而縷々御示諭ノ段一々敬悉、御情理謹而拝領仕候。元々今回ノ事ノ成立ヲ告候も、其元河原・杉山両翁初諸有力ノ餘光ニテ、其御紹介御發動ハ閣下ニ依リ候事ハ今更申込も無之、幸ニ成立ニ相及、多少國恩報效ノ端緒共相成候へハ、閣下御賛襄ノ恩志ヲ空フセサル事トモ相成候事、幾重ニも日夕不離胸懷候。会社創立ニ付、御出金願上候も元々

小生ノ本志ニ無之、追々御返弁ノ道相立候様取運可申候間、左様御承知被成下度候。将又既ニ河原氏ノ御送呈相成候命令書も其筋分下付、其業務實施ニ付テ所要ノ資本ハ味野々崎翁初メ河原・杉山両翁ニ於而夫々方法ヲ立テラレ候事ニ決定仕居候間、最早此上創立等ノ名面ニテ御贖金相願候儀ハ無御座候間、是又左様御承知置被下度奉願上候。當地来着後、旧會社ニ対スル引繼上ノ交渉、命令實施ニ付テノ諸準備ニ取掛リ、夫々進行無故障有様ニ御座候間、何卒御降慮被成下度御願申上候。右ハ不取敢拜答申上度、併セテ無事再渡ノ儀御報陳迄、愚札如此御座候。上海ハ百度内外ノ熱度ニテ昨今ハ随分烈敷候。尚時分柄随分御大切ニ御撰養偏ニ奉懇禱候。敬具。尚河本・牧ノ両氏も健安ニ有之、宜敷申上候様被申出候。不悉。龍平拜具 七月二十七日上海 野崎老大人侍史

追而、中島庄氏へ御序ノ節、宜敷御通聲奉祈上候。

(封筒表) 岡山縣備前國邑久郡幸嶋村大字西幸嶋ノ野崎萬三郎殿ノ台展拜覆

(封筒裏) 清国上海ノ大東瀛船會社ノ白岩龍平ノ明治三十一年八月三日着

54 【明治三十二年二月二十二日付】① 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛

拜啓、雨中遠路御勞駕、千萬奉痛入候。小生儀十一日上海發、昨日河原氏卜来岡仕候。今朝一寸推參仕候得共、未夕御到着無之、得拜芝不申候。本日午後第三時分当家ニ於而御會合願上候事ニ相成居申候間、何卒其時刻御差繰御光臨被成下度、此段奉願上候。委曲ハ後刻拜面ニ相讓申度、頓首敬具。 二月二十二日 三好野花壇ニ而 白岩龍平 野崎老臺帛皮下

(封筒表) 上ノ町イテウヤニテノ野崎万三郎様ノ台展

(封筒裏) 三好野花壇ニテノ白岩龍平ノ明治三十二年二月廿二日岡山ニ而

55 【明治三十二年二月二十二日付】② 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛

謹上、過刻書上ヲ以而奉得御意候、今夕三時分当所ニ御光臨願上候儀、只今河原氏、杉山氏分帰宿被致、杉山氏急ニ鉄道一条ニテ今夕差支相生候趣ニテ、甚以テ勝手ケ間敷、雨中遠路御出係ノ處へ勝手ノ次第二ハ御座候得共、明日午前第十時分會合ノ事ニ相改メ申度、右ニ付尊臺御都合如何可被為在候哉、若シ右時刻御差練相叶候へハ、其時刻御會同願上候事ニ仕度、此段重テ急キ奉得御意候也。頓首謹白。二月廿二日 龍平 野崎大人侍史

（封筒表）野崎万三郎様 急

（封筒裏）白岩龍平／明治三十二年二月廿二日岡山ニ而

56 【明治三十二年二月二十八日付 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛】

謹呈、陳は此度ハ久々數拜紫ヲ得、幸榮之至奉存候。当日急キ御出立ノ為、御見送も不仕、欠礼ノ段御仁容被成下度奉願候。二十三日岡山發、二十五日東京着、今ニ滞在仕居候。三四日内此地ヲ引上、大阪ヲ経而海路帰申ノ途ニ上リ可申候。先ハ過日雨中御老体御勞煩奉煩候御礼旁、右御一報申上度、時下随分御自重奉禱上候也。勿々敬具。二月二十八日 白岩龍平 野崎老臺閣下

（封筒表）岡山縣邑久郡幸嶋村／野崎萬三郎様／親展

（封筒裏）× 東京芝信濃屋方／白岩龍平／明治三十二年三月二日着

57 【明治三十二年四月二十五日付 白岩龍平書簡 野崎万三郎宛】

奉謹啓候。爾来愈御清光被遊御起居、萬福奉欽賀候。降而野生儀、會社總會ニ出席ノ為、去ル二十二日上海出發、帰朝仕候。此半期間ノ成績ハ先以而可也ノ順運ニ有之、将来も追々發達ノ見込ニ御座候。是偏ニ二十九年以来閣下御高顧ノ賜ニシテ、既往ヲ追憶シテ謝スル所以ヲ知ラズ候。方今、支那問題ハ漸ク社會ノ一般ニ耳目ヲ傾クル所ト相成候ニ、我國ハ外交ニ貿易ニ、

歩々人後ニ落ち、故東方齋荒尾精先師も地下ニ瞑目セサルヘク、驚鈍小生等ニ取テも任重而道轉タ遠キノ感有之、此際一層ノ奮發ヲ要スル儀、日夕自ラ省テ警惕罷在候。今回神戸總會ニハ御多用中、殊ニ遠路毎々御光臨ヲ煩シ候儀、偏ニ恐縮千萬ニ奉存上候。河原翁も突然ノ大患ニテ御本復も如何ト奉心配候處、餘程逐日輕快ニ被為向候趣、幸福此上ナキ事ニ御座候。何レ拝紫ヲ得テ萬縷陳述仕度、不取敢帰途寸楮ヲ以而奉得御意候。艸々敬具。四月二十五日 神戸丸舟中 白岩龍平 野崎大人侍史

尚以、故河本磯平氏真影複写罷在、出来ノ上ハ一葉捧呈可仕候。同氏石碑ハ記念碑ト共ニ上海墓地ニ建設ノ事ニ設計相立、友人中ニテ分担、正ニ工事ニ為取掛申候。

(封筒裏) 備前國邑久郡幸嶋村字西幸嶋／野崎萬三郎殿／親展

(封筒裏) 封 馬関ニ於テ／白岩龍平／明治三十二年四月廿七日着

58 【明治三十二年五月三日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

謹呈、前略御仁免被成下度候。陳は去月三十日午後第四時分神戸市東常盤ニ於而豫定ノ如ク會社總會相開キ、同日午後十一時半散會仕候定式總會ニ於テ、当期間決算諸報告ノ認定ヲ得、臨時總會ニ於而二三ノ議案ヲ議了相成申候。村山氏ヨリ別ニ意見書提出、之ニテ會長代理杉山氏ト右村山氏ノ間ニ姑ク議論有之、終ニ決定ニ至ラスシテ立別レト相成申候。杉山氏ハ多少立腹ノ様子ニ見受申候。本件ハ事情入込居候ニ付、近日小生出岡ノ上拜芝ヲ得テ委曲可及陳達候間、左様豫メ御承知置被下度奉願候。尤是ハ感情上ノ問題ニ過キスト奉存候間、御心配被成下間敷候。

河原翁御病氣も漸次御快方ニテ大悦御同様ニ奉存候。然レトモ尚今後半年以上ハ療養之後ニ非レハ御健康ハ十分ニ相復シ申間敷奉存候。花房御老人突然御長征之段承及、驚人申候。我縣ノ寶ヲ亡ナヒ候儀、呉々も御痛惜申上候。

迂生儀、今回、西薇山翁次嬢貴受、味野野崎氏ノ媒酌ヲ以而近々挙式ノ筈、閣下ニハ多年ノ御高顧ヲ蒙リ候間柄、吉凶共告

ノ例ニ依テ一寸御披露申上候。御同悦賜リ候は、光榮ニ奉存上候。右近狀一二御報申上度、書餘一々紫眉拝接ノ日ニ譲リ申候。頓首敬具。 五月初三日大阪ニ於而 龍平 野崎老臺侍者

（封筒表） 備前國邑久郡幸嶋村字西幸嶋／野崎萬三郎様／親展

（封筒裏） 大阪堂島舟大工町百二十五／大東會社ニテ 白岩龍平／明治三十二年五月四日着六日披見

59 【明治三十三年五月十四日付 白岩龍平書簡 野崎萬三郎宛】

謹呈、爾來ハ一向ニ御無沙汰、不相濟ル事ニ御座候。益以御機嫌宜敷、御起居御靜安ノ御事ト奉拝察候。降而小生事春來出京、于今滞在罷在候。儲容易ナラサル御高配被為垂候大東會社も、田辺氏等引受ラレ、以後順運ニ發達、今度株式會社トシテ航路擴張ノ計畫相立候仕合ニ有之、別冊豫算書郵呈仕候間、御一覽被成下度。時勢ノ向フ處トハ云へ、次第ニ事業ノ進運ニ罷成候ハ、其元全ク左右ノ御配慮ニ出テ、河原翁等容易ナラサル御苦心ノ餘福ト奉感謝候。河原氏も春今又々御入院ノ由、御病況如何ト遥察ニ不堪奉存候。右御無沙汰御詫旁近狀御報、御安否奉伺上度、寸楮如此御座候。勿々頓首。 五月十四日 龍平 野崎大人梧右

追而、御家内御一統へも乍憚宜敷御鳳聲奉願候。尚以乱筆御仁容被成下候。

（封筒表） 備前國邑久郡幸嶋村／野崎萬三郎様

（封筒裏） × 東京市京橋區本八町堀貳丁目壹番地／大東汽船株式會社／白岩龍平／明治三十三年五月十六日着